Culture,
Energy
& Life

CEL

vol.121
March 2019

特集
ルネッセ
今とこれから

Special Feature /
Renesse – The Present and the Future

情報誌『CEL』は、
116号から120号まで
5回にわたって「ルネッセ（再起動）」をテーマに、
「場―都市（まち）」「交―交流（つながり）」「耕―文化」の理論編、
海外の取り組みに学ぶ実践編へと展開を続け、
日本社会が抱える問題の本質を浮かび上がらせるとともに、
再興へ向けた方法論を提起してきました。
今号では総集編として
これまでの活動を振り返りながら、
「ルネッセ」の今を捉えつつ、
未来へとつなげていくための実践を目指します。

CEL

Culture, Energy & Life

vol.121
March 2019

表紙／2015年5月に開催されたCOSMIC LABによるイベント「高野山1200年の光――南無大師遍照金剛」（写真提供／Reiji_Isoi）。扉／2014年3月に高松塚古墳を舞台に開催されたCOSMIC LABによるイベント「SPACE ECHO 回光」の様子（写真提供／Reiji_Isoi）。

CONTENTS

特集
ルネッセ 今とこれから
Special Feature / Renesse – The Present and the Future

［対談］
02 **「文楽」で大阪を再起動する**
竹本織太夫［文楽太夫］×
池永寛明［大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所所長］

［インタビュー］
未来を考える――1
10 **アートとテクノロジーがつなぐ過去と未来**
COSMIC LAB（コズミック・ラブ）

［インタビュー］
未来を考える――2
16 **科学技術が人間を自由にする技であるために**
上田紀行［東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長］

22 **「ルネッセ」を総括する**

2年間の活動を振り返って
池永寛明

過去の生活文化を掘り起こし未来を考えるきっかけに
谷直樹［「大阪くらしの今昔館」館長］

文化的な土壌改良が大阪の地盤沈下を解決する、か？
橋爪節也［大阪大学総合学術博物館教授］

広がる「ルネッセ」未来へと文化を紡ぐ企業の活動
株式会社Mizkan／株式会社シマノ

「ルネッセ」×ナレッジキャピタルがつなぐ「これまでと、これから」
野村卓也［ナレッジキャピタル総合プロデューサー］
保田充彦［株式会社ズームス代表］
山本粧子［株式会社スーパーフェスティバル クリエイティブディレクター］

つながる「ルネッセ」未来に向けて文化を伝える活動
吉田千春［気仙沼市地域福祉計画推進委員］
鐘燕［通訳者］
トロイアノス・アンジェラ［株式会社結コンサルティング代表］

五感で学ぶ、上品で上質な大阪の文化
――「上方生活文化堂」が取り戻していること
池永寛明

40 **スポーツクラブが都市を駆動させる**
――ドイツ・エアランゲンからのリポート
高松平藏［ドイツ在住ジャーナリスト］＝文

［レポート］
46 **「内と外」「過去と現在」でつながる食文化**
ルネッセ・セミナー「食で、まちを変えられるのか」報告

［エッセイ］
52 **私と京都** ベニシア・スタンリー・スミス［ハーブ研究家］＝文

［書籍案内］
54 **「ルネッセ」の今とこれからを考えるための10冊**

［CELからのメッセージ］
未来を夢見る東京、過去に固執する大阪 池永寛明

「文楽」で大阪を再起動する

その都市ならではの価値を掘り起こし、再起動へつなげる連続特集企画「ルネッセ」。今号では、六代目竹本織太夫氏に、江戸時代の大坂で花開き今もなお進化し続けている「文楽」の本質を余すところなく抽出していただき、そこから見えてくるこれからの大阪の再起動の方法論について語り合う。

増田智泰＝撮影

対談

［文楽太夫］竹本織太夫 Takemoto Oritayu × 池永寛明 Ikenaga Hiroaki ［大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所所長］

平成30（2018）年12月文楽公演『鎌倉三代記』より
写真提供／国立劇場　協力／国立劇場、人形浄瑠璃文楽座

神棚のおはぎをちゃぶ台に降ろす

池永　大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所は、「ルネッセ（Renesse）」をテーマに掲げ、活動を展開しています。「ルネッセ」とは、「再び・循環（ren）」と「実在する（esse）」を組み合わせた造語です。都市や地域に埋没する本質を掘り起こし、新たなことと融合して方法論（モード）を再構築し、再起動させようという試みです。これまで情報誌『CEL』で5回にわたってさまざまな観点から発信してきましたが、今回は今一度大阪に立ち返り、大阪の象徴とでもいうべき文楽をテーマに、まちの再起動のあり方と方法論を考えていきたいと思います。

織太夫　文楽は330年以上かけて、ある意味芸術というものになり、今ではユネスコの無形文化遺産になるまでに成長しました。先人たちには感謝していますし、先人たちが携わり大事にしてきたものに対し、私が承継し後世に伝えていくという自覚ももちろんあります。ですが、今のままで十分であるとは思っていません。

池永　テレビも映画もスマホもない江戸時代、人形浄瑠璃は大坂商人たちに熱狂的に支持されました。人形浄瑠璃は商人にとって多面的に情報をつかむ場であり、学びの場であり、当時は決して高尚なものではなかったのですよね。

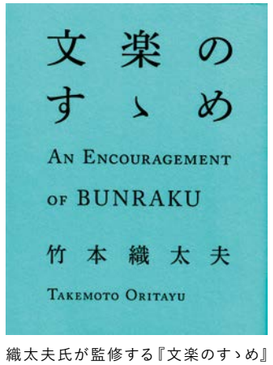
織太夫　今から335年前、貞享元（1684）年に、初代竹本義太夫が道頓堀に竹本座を興し、活況を呈しました。従来の人形浄瑠璃は、歴史上の人物を主人公とした「時代物」の作品ばかりだったのですが、初代義太夫は当時の市井の人物、江戸時代の現代人を主人公とした「世話物」というものをつくったのです。今のワイドショーネタですよね。

その最初の作品が、『曽根崎心中』です。時代物の歴史上の人物でなく、お初という19歳の若い女の子が主人公。そのおかげで「19歳の女の子が主役なんやて。この間、曽根崎であった心中事件の話をやるみたいよ」と、噂を聞きつけた若い女の子たちがこぞって観にくるようになったんです。実は料金設定も工夫していて、当時手に職をもっている女の子といったら髪結いぐらいでしたが、彼女たちが1日働いてもらえる金額にしていたそうです。

池永　まさに人形浄瑠璃を再定義し、枠組みを変えることによって、新たな価値を創造し、客層を劇的に変えたということですね。

織太夫　そうです。私は文楽を、神棚や仏壇に供えられているおはぎに見立てているんですが、神棚から

平成30（2018）年12月文楽公演『鎌倉三代記』「高綱物語の段」を演じる竹本織太夫氏。
写真提供／国立劇場　協力／国立劇場、人形浄瑠璃文楽座



織太夫氏が監修する『文楽のすゝめ』（実業之日本社、2018年）は、文楽の紹介だけでなく、近松門左衛門ゆかりのパワースポットや織太夫氏が愛する名店の案内など、大阪のガイドブックのようにも楽しめる。

ちゃぶ台に降ろすことが大事だと思っています。神棚や仏壇に置いてあるおはぎには手を出せない。でも家に帰ってちゃぶ台に置かれていたら勝手に食べられます。先の竹本座がやったように、この神棚からちゃぶ台に降ろす作業は今も必要です。

池永　文楽は高尚な芸・教養というイメージをもたれがちなので、それは面白い考え方ですね。

織太夫　重要無形文化財保持者（人間国宝）やユネスコの無形文化遺産といった立派なところばかり目立ってしまうと手を出しづらい。私が監修をした『文楽のすゝめ』でも、文楽を堅苦しく語るより、大阪には美味しいものや大阪城やいろいろなものがあるけれども、大阪に来たら文楽も選択肢に入れてほしいという気持ちで、パッと手に取りやすい工夫をしています。我ながら大阪愛にあふれた本です（笑）。

新旧混じりあう大阪は今も昔も人気の地

池永　大阪愛に関していうと、大阪は、昨年「世界で最も住みやすい都市ランキング」（英誌『エコノミスト』）でウィーン、メルボルンに次ぐ世界第3位になりました。その際、各都市の共通項が何かないかと考えたのですが、おそらく新と旧が「まじりあっている」ということではないかと。まじりあうにはふたつの漢字があって、「交」という字は使った食材が分かるようなまぜかた、「混」という字は元の食材を見えなくするようにまぜる、つまりAにBを入れたらCが生まれるというまぜかたです。そして私は、大阪の本質は「混ぜる」の方じゃないかと思っています。「混」は「氵（水）＋昆（丸くまとまる）」で、水が流れて丸くまとまっていく様を表しますが、そのように多様なもの、新旧という時間軸を混じりあわせて新たなものを生み出してきたのが大阪という都市です。文楽も伝統に安住することなく、常に新しい価値を生み出そうとしておられるのですね。

ちなみに江戸時代の大坂観光の訪問先ベスト3は、四天王寺、大坂城、阿弥陀池なんですよ。

織太夫　明和年間に竹本座の劇団が分裂したとき、初代竹本綱太夫が「竹本義太夫座再興座本」を名乗って興行したのが阿弥陀池、和光寺門前の芝居でした。当時は阿弥陀池界隈が最先端のまちだったのですね。ニューヨークだったらブルックリンみたいな感じでしょうか（笑）。

池永　そうかもしれません（笑）。道頓堀で芝居も観るんですけど、順位は阿弥陀池の方が上です。江戸時代の大坂は、日本一の観光都市でした。たとえば「天下の台所」の天満の青物市場や雑喉場の魚市場を見に行ったのはもちろん、北前船が出入りする湊、大丸などの呉服店、鴻池とか三井とかの大店といった大坂のダイナミズムを見て回ったのでしょうが、でもやっぱり人気は人形浄瑠璃と日本一美味しいといわれた大坂料理でした。2泊3日で大坂に滞在し、楽しみ、多くのことを学んだと思います。京都や奈良観光との違いの本質は、まさにこの芝居や大坂料理という体験です。それは、USJやキタ・ミナミを周遊する現代の観光と同じ文脈です。

織太夫　鴻池といえば当主は素人浄瑠璃をやっており、うちの初代鶴澤道八は、11代鴻池善右衛門のお抱えの三味線弾きだったそうです。昔はそういう交流がたくさんあって。

池永　新旧だけでなく、人と人との混じりあいも重要です。都市もそうですけど、モノづくり、ビジネスもそうだと思うんですね。新旧の混じりあいのなかで、それらをつなぐのは何だろうと思ったときに、それはまさに「文化」であると思っています。そういう意味でも、大阪の文化の中核ともいえる文楽の役割は大きいのではないでしょうか。

大阪に文楽が残っているのは必然性があるから？

池永　私は大学で「大阪の風土と文化」の講座をもっていますが、人形浄瑠璃のことを話したところ、学生の感想文に「私は織太夫さんに文楽を教えてもらいました」と書かれていたのでビックリしました。織太夫さんは、長年地元の小学校で文楽を教えていらっしゃいますよね？

織太夫　授業での「子ども文楽」は、今年で18年目になります。1学年が1クラス30人ほどの少人数で、ほとんどが黒門市場や商店の娘息子たち。でも累計で考えると、500人以上の若者が浄瑠璃を語れて、三味線も弾けて、能管も吹けて、太鼓も叩けて、人形も遣えるようになった。奇跡的なことです。ちなみに文楽の太夫だけで稼いでいる人間は19人、ある意味絶滅危惧種です。今は「文楽のすゝめ計画」というのをやっています。大阪に来てもらうための展示会をしたり、義太夫節の体験教室を中之島図書館でやったり。

こうした活動は、結構、昔からやられていました。明治期の廃仏毀釈の時代に、それこそ「ルネッセ」ですけど、仏教を再興させようと頼った先が人形浄瑠璃だったわけです。たとえば『霊坂観音霊験記』は、盲目のだんなが「死ぬ」と言って崖から飛び降り、奥さんも飛び降りて、普通だったら死ぬところが、観音様のおかげで目が見えるようになってふたりとも生きのびる。文楽では普通あり得ないハッピーエンドです。これは仏教にもう一度光を当てるために人形浄瑠璃が使われたという証拠です。

池永　私は、元禄のときにつくられた太夫、三味線、人形遣いの「三業一体」こそが、商業都市大坂ならではのイノベーションだったんじゃないかと思います。

織太夫　竹本義太夫の登場によって、それ以前の浄瑠璃が「古浄瑠璃時代」と呼ばれるようになり、新しい時代の幕開けを迎えたんです。浄瑠璃にもいろいろありますが、ベー

平成30（2018）年12月文楽公演『鎌倉三代記』より
写真提供／国立劇場　協力／国立劇場、人形浄瑠璃文楽座

今後の文楽公演

●2019年4月6～29日（18日除く）　国立文楽劇場開場35周年記念4月文楽公演
第一部『通し狂言仮名手本忠臣蔵（大序より四段目まで）』、第二部『祇園祭礼信仰記』『近頃河原の達引』　大阪・国立文楽劇場

●2019年5月11～27日　5月文楽公演
『通し狂言　妹背山婦女庭訓』　東京・国立劇場

シックはあくまで上方です。発祥地としては京都だと思いますが、大坂に移ったんですね。これはやっぱり経済が大坂に来たから。今、東京にいろいろなものが集まるのも経済が東京に移ったからでしょう？　でもどんな状況にしろ、人形浄瑠璃という芸能が大阪を離れなかったのは、大阪でなくてはいけなかったからなんです。

池永　人形浄瑠璃の多くの作品の舞台が大坂や京都だっただけでなく、本質が「商い」であったからではないでしょうか。人形浄瑠璃にとって大坂にいることの必然性があったわけですね。

織太夫　演目やことば、訛りだけでなく、楽器もそうです。三味線は日本の楽器だと思われがちですが、ルーツは琉球の三線で、その元は中世ペルシャの楽器だそうです。材料を見ても、胴は花梨、棹は紅木でインドやミャンマー産、撥は象牙、駒は水牛の角、糸はシルクです。まさにシルクロードの終着地点である大坂が生んだ芸能といえます。

天下泰平、五穀豊穣を祈る御祝儀曲の『寿式三番叟』にしても、「とうとうたらりたらりら、たらりあがりららりとう、ちりやたらりたらら、たらりあがりららりとう」と……何を言っているか分からない（笑）。これはサンスクリット語で、「穀物は輝き、輝きて」だそうで、穀物とは米や小麦で、収穫の喜びを「悦びありや、悦びありや」と舞っているのです。

池永　古代より、遣隋使・遣唐使のみならず、シルクロードを通り、世界最先端の大陸の文化を日本に取り入れ、日本的に翻訳・編集してきましたが、その方法論は江戸時代にも発揮されたということですね。しかし、どうしてサンスクリット語のまま演じられるようになったのでしょうか？

織太夫　それは声明からきているので、やはり仏教の影響ですね。

また、人形の髪の毛はチベットのヤクという動物の毛でつくられているのですが、チベットからわざわざ輸入していたのではありません。当時、唐ものや高麗ものといった磁器や陶器が珍重されており、船でそれらを運ぶ際にヤクの毛で包んでいたんです。それを大坂は、上手に再利用したというわけ。面白いでしょう？

池永　シルクロードの終着地点である大坂で、世界の「技術」が日本的なものと融合した形が、現代の文楽で観たり聴いたりできるのはとても興味深いですね。

大坂人の編集力

織太夫　私は六代目竹本織太夫を襲名した際に『摂州合邦辻』下の巻の切「合邦内」を演じましたが、実はもともとはインドの王子様の物語なのです。物語の中で「俊徳丸」という人物が登場しますが、本来は「信徳」と書きます。これは中国におけるインドの尊称です。そして「丸」とつくと、たとえば牛若丸や梵天丸などは武家の子が幼名として後を継ぐべき嫡男にも使用される。いわば王子ですよね。ということは、インドの王子様の親殺しであるとか、継母の恋であるとか、放浪であるとか、それらを編集し、大坂版の物語に変えてしまったということなんです。

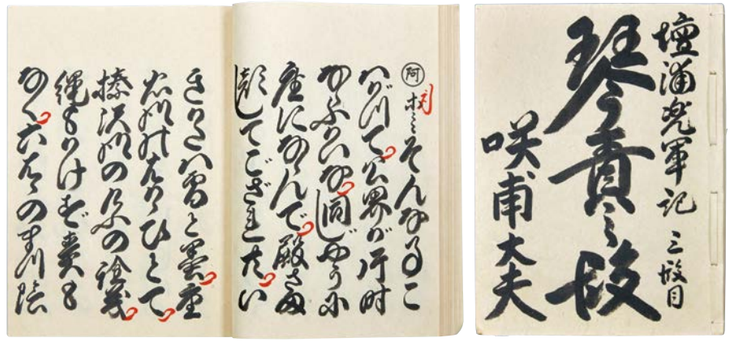
池永　日本という「内」と世界という「外」とを融合する編集力はすさまじいですね。江戸時代は鎖国していたといわれますが、決してそうではなく、むしろグローバルな時代だったと言えるのですね。

織太夫　ある意味、今日のハリウッドのようなものだったんでしょう。海外から大坂に入ってきたものを大坂人用に全部つくり直した。

池永　全て編集されたものですか？

織太夫　そうです。大坂人の編集力には驚きです。だから、こうしたこ

太夫の語りにおいて、床本、見台（写真下）、尻引、オトシ、腹帯（写真上）などの道具類は欠かせない。特に腹帯は芯のある声を出すための必需品で、長年使い続けているため、現在の名の下にうっすら「豊竹咲甫太夫」の文字も見える。



床本は、太夫が語るときに用いられる台本のこと。浄瑠璃文字で書かれ、「朱（しゅ）」と呼ばれる語り方の指示も記されている。太夫自身が手書きをするため太夫によって表現のしかたも違ってくる。その個性を楽しむのも文楽の魅力のひとつだ。

とをちゃんと語り聞かせる人が出てこないといけない。これからの時代は語りの時代だと思います。テレビが面白くなくなって、4Kすらまだみんな持っていないにもかかわらず、さらに8Kとか言われても興味がもてませんよね。逆に今、地下鉄なんかに乗っているとラジコ（スマホでラジオが聴けるアプリ）の広告だらけで、実際にあちらこちらでラジコを聴いている人がいるわけですよ。これからはラジオの時代。語り聞かせるという時代になってきているんです。「プロ野球でスターが出なくなったのは、ラジオの中継がなくなったからだ」と誰かが言ってましたけど、要するにイマジネーション、想像力を働かせるっていうことがなくなったんです。タクシーに乗っていてラジオで相撲中継をやっていても、うまい人がしゃべったら生で見ているよりよっぽど頭に入ってくる。ちなみに文楽も、今は「観る」ですが、昔は「聴く」と言われていたんです。

池永　おっしゃる通り想像力は大事ですよね。災害のときもラジオが一番頼れる存在です。

織太夫　災害のときに4K、8Kはいらない。情報をきっちり正確に語れる人が必要です。スマホの普及で多くのモノがなくなりましたが、ラジオは復活しています。

池永　今、スマホなどの情報革命によって、生活、人間関係、教育、仕事の進め方などが大きく変わりました。とりわけ、インプットとアウトプットしか見えず、プロセスがブラックボックス化しつつある。以前、対談させていただいた松岡正剛さんが、スマホによるメリットもあるが、スマホによって弱くなる時間軸と地理軸を取り戻すことが重要だと話されていました。

織太夫　時間軸とはどういうことでしょうか？

池永　先ほどの編集のお話だと思います。大阪の人は古代から現代までの一気通貫の歴史、同じ場所に幾重も積層された物事を混じりあわせながら、現代的視点で組み換え、編集できていたのでしょう。だから『摂州合邦辻』といった題目も理解できる。演じる人、観客の双方に編集能力があった。しかし、今それがかなり薄れていて、瞬間瞬間のものしか分からなくなり、全体がつながってこない。

織太夫　だから編集能力に長けた人が重要視される時代なんですね。今、感度の高い人、携帯だったらアンテナが4本、5本立っているような人たちは、すぐ東京へ行ってしまい、大阪にあんまりいないのです。それはやっぱり経済が大事だからなのでしょうけど。

　平賀源内のことをご存知ですよね。エレキテルで有名ですが、彼は広告業界だったら日本初のコピーライターとも言われています。「土用の丑の日」とかつくっている。だけど一番社会に影響を与えたのは、浄瑠璃作者「福内鬼外（ふくないきがい）」としてなんですよ。彼の初作『神霊矢口渡（しんれいやぐちのわたし）』は、江戸で初演された浄瑠璃本のなかで最も良く売れた作品でした。アンテナが4本、5本立っている、こうした人を東京に流出させてはいけない。

池永　幕末の大坂には、博覧強記で有名な木村兼葭堂（けんかどう）以外に、暁鐘成（あかつきかねなり）という人もいたんです。商人であり、浮世絵師であり、劇作者やコピーライターでもあり。彼のアンテナ、情報収集能力は凄かった。そして、それを編集してつくる能力、スピーディーにつくる能力も高かった。大坂にはそういう土壌があった。

織太夫　大阪で生まれて大阪で育てられた私にとって、大阪への恩返しは浄瑠璃しかないと思っていますが、文楽の再興という意味でも、大阪に多様な人が数多く来ることはチャンスだと捉えています。今年のG20大阪サミット、ラグビーワールドカップ、その先の万博もそうですね。大阪に住んでいる人だけではなく、大阪に来る世界中の人たちが、文楽をさらに成熟させてくれると思います。新しい力や才能が、新しい文楽をつくると信じていますし、私もそのための努力を続けていかないといけません。

池永　まさに「分」ですね。「分」とは、自分、分別、本分、存分、分際、分限などと使われ、自分がなすべき役割を意味していますが、それが織太夫さんの「分」ですね。

織太夫　そうです。100年前の華やかなりし大大阪時代の、文楽黄金時代再興に向け、種を植え、毎日毎日水をあげ、肥料をやり、私が亡くなる頃には、うちの子どもたちやまだ見ぬ孫たちや、後輩たちが「あの人がいたから今の文楽がある」と、そう言ってもらえるように。

池永　先ほどからお話を聞いていて、

文楽再興で大阪を再起動

つくづく思ったことは、文楽はAとBを引っ付けてCを生み出す力を有しているということです。だからビジネスマンとして観ても、江戸時代の物語が腹落ちします。商いの原理原則や人間関係や義理、おもてなしといった大阪スタイルの本質を、文楽を通して学び、大阪人としての五感を磨く教材としても観ることができます。だからビジネスマン必見必聴だと思っています。

織太夫　岡倉天心が「芸術こそが政治や経済を動かすことができる。また、芸術と職人の技芸を分けてはならない」という言葉を残しています。ちなみに文楽の太夫・三味線・人形は技芸員と呼ばれますから、まさに技芸の人であり、芸術家でもあると。そして、大阪における芸術というのは人形浄瑠璃なんですね。文楽こそが大阪の経済と文化。大阪のまちづくりの将来にもつながるんです。

　私の長年の知り合いの話ですが、ハーバード・ビジネス・スクール在学中、先生に「君は日本人なのに文楽を観たことがないのか？　文楽というのは世界で一番の芸能だ。こんな素晴らしいものはない」と言われたそうです。その文楽が右肩下がりを始めたのは、保存や承継だけを目的とし、思い切った革新的なものをつくらなくなったからじゃないですか？　だから、いろいろな実験があっていいんですよ。

池永　文化の語源は耕す・栽培する・磨く（cultivate）ことであり、繰り返すことに本質があるのではないでしょうか。繰り返しながらも、新たなことを加えて、進化・洗練し続けることが重要だと思います。

　最後に、織太夫さんのこれからの目標を教えてください。文楽再興に向けて、どのような活動を展開していかれますか？

織太夫　まずは太夫の数を倍増させたいですね。特に大阪、上方・関西の出身者を増やしたいです。何をやるにも太夫がいないと始まらない。そのためには、まずは広く多くの人に文楽という素晴らしい芸能にふれてもらい、一生の仕事にしてもらえるように、私自身が素晴らしい舞台を務めないといけません。

池永　次世代にどう承継していかれますか？

織太夫　ある方に子ども向けの新作を書いていただき、今曲をつけています。文楽版の『トイ・ストーリー』ですね。それをまだ文楽を観劇したことのない子どもたちに見せようと企てているわけなんです。たとえば、「文楽公演の終演後の舞台裏で人形たちが自分たちの意志を持って動き出す話です」と言われても分かりにくいけど、「文楽版の『トイ・ストーリー』とでも申しましょうか。文楽ファンお馴染みの人形や詞章も出てきて、大人も楽しんでいただけると思います」って言ったら、観に行こうかなと思うのではないでしょうか？

　それから、文楽はいわゆるピラミッドの頂点で、昔は女流義太夫から、だんな衆や素人の愛好家、それから小・中学生の子どもたちまで、それぞれが稽古に励んでいたんですよね。リトルリーグやシニアリーグ、草野球やノンプロといった野球のように。そうしたピラミッドを再構築することによって、大阪のまちは変わるんです。もともと文楽のまち、浄瑠璃のまちだったんですから。

池永　文楽は、大阪というまち、大阪人を表す原風景であり、大阪スタイルの本質を体現しています。文化を承継するのはひとりの天才的なクリエーターだけではだめで、それを理解し、支持する人々が必要です。そういう意味で文化は都市・地域戦略です。

織太夫　私の大師匠（豊竹山城少掾）も「石にかじりついてでも大阪を出てはいけない」と、おっしゃいました。文楽協会を東京に、という話もありましたが、今日お話ししたような文楽の歴史を考えまして、やはり大師匠のおっしゃるように、大阪の土地を離れてはいけないと私は思いました。その気持ちを大阪の人たちにひとりでも共有していただければ、文楽を長く愛していただけると確信しています。

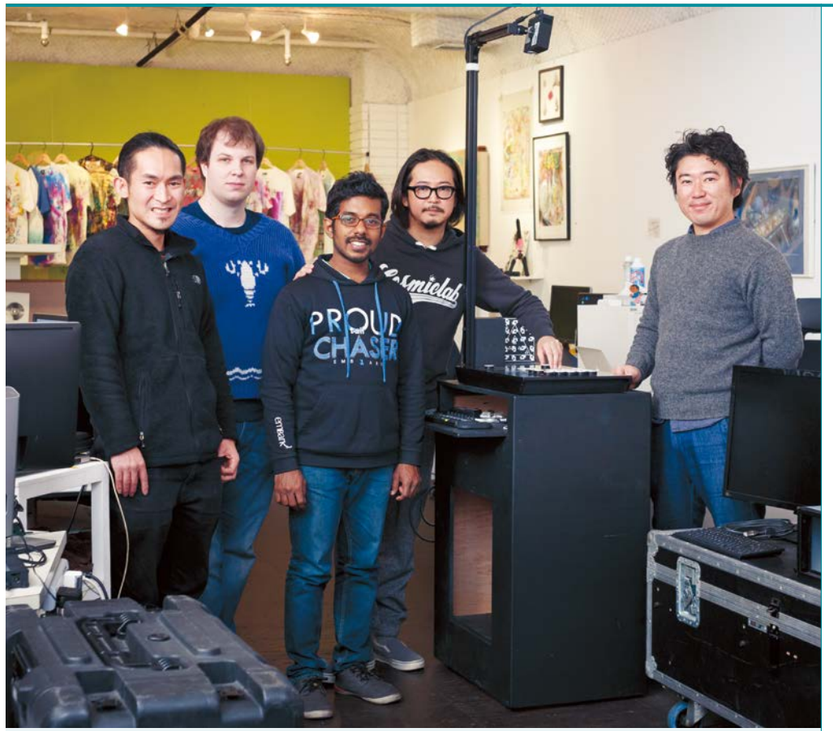
竹本織太夫
たけもと・おりたゆう
1975年、大阪府・心斎橋生まれ。2018年に豊竹咲甫太夫改め六代目竹本織太夫を襲名。祖父は文楽三味線の二代目鶴澤道八、伯父は鶴澤清治、実弟は鶴澤清馗。NHKテレの『にほんごであそぼ』にレギュラー出演するなど、文楽の魅力を幅広く発信する。11年、第28回咲くやこの花賞、13年、第34回松尾芸能賞新人賞、平成25年度大阪文化祭賞グランプリ受賞。

池永寛明
いけなが・ひろあき
大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所所長。1959年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部にて人事勤労、営業部門にてマーケティングに携わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス帰社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年より現職。

未来を考える——1

アートとテクノロジーがつなぐ過去と未来

これまでさまざまな角度から提起してきた「ルネッセ（再起動）」。ここではその実践例ともなる大阪発のアート集団の仕事を紹介する。伝統文化にアート&テクノロジー表現を融合し、過去から現在、そして未来へ創造しつなげていくための手法、またそこから導かれる未来とは——。代表の三浦泰理氏をはじめ、国際色豊かなスタッフの皆さんにお話を伺った。



インタビュー

COSMIC LAB

コズミック・ラブ

加藤しのぶ=構成　宮村政徳=撮影

2015年5月、開創1200年に沸く真言密教の聖地高野山で、「高野山1200年の光——南無大師遍照金剛」と題した声明と映像、光の共演によるイベントが行われ、話題となったことをご存知だろうか。

今号の表紙を飾っているが、そのイベントの舞台は高野山壇上伽藍内大塔。この地に道場を開いた開祖弘法大師空海がシンボルとして建立したことから「根本大塔」とも呼ばれる仏塔である。

イベントは日没より開始した。その姿を闇に沈めていた大塔をレーザー光線が浮かび上がらせ、僧侶衆による声明が厳かに響き始める。天空から舞い降りてきたかのような、美しい光の散華に始まり、蓮華、曼荼羅……次々と塔に映し出される映像に合わせるかのように力強さを増す声明や和太鼓の響きが空間を震わせるなか、大きく本尊大日如来が映し出された瞬間、会場を埋め尽くしていた観衆からどよめきと大きな拍手が起こった。

そこに感じられたのは、プロジェクションマッピングという現代手法で歴史的建造物を彩った映像美への単純な賛辞にとどまらない、声明という伝統文化にテクノロジーを融合させることで生まれた、新しい祝祭空間に対する深い感銘である。

本誌が提起する、「ルネッセ」実践の好例ともいえる、このイベントの総合プロデュースを担当したのは、大阪を拠点とするミックスメディア・プロダクション「COSMIC LAB（コズミック・ラブ）」。

「アートとテクノロジーを結びつけ、デジタルシステムまでを作品に昇華した未知なるヴィジュアル&オーディオの体験を探求する実験室」というコンセプトのもと国内外を舞台に活躍するCOSMIC LABが、高野山と出合ったことで見えたものは何だったのだろうか。そのクリエーション活動のベースとなる大阪という場の魅力やアート&テクノロジーのこれからについてお話を伺った。

テクノロジーがつなぐ伝統文化

大阪ミナミ、千日前繁華街のランドマークのひとつである味園ユニバースビル。近年公開された映画『味園ユニバース』の舞台ともなった、極彩色のネオンがひときわ目を引く複合商業ビルの中に、COSMIC LABはある。

現在は外国人メンバーふたりを含む5人のチームで活動するが、仕事に合わせて外部スタッフと組みながら、フレキシブルなスタイルでクリエーションを行っている。

高野山でのプロジェクトを振り返り、「伝統や文化とは『古いもの』ではなく、『未来へと続いているもの』で、そこに対してコミットできた、その続きがここから始まったと感じました」と話すのは、代表・ディレクターであり、ColoMiuller名義でVJ（ビデオジョッキー）としても活動する三浦泰理氏。

開創1200年というアニバーサリーイヤーに、声明をもとにして50年は語り継がれるようなことをしたい——。きっかけは、高野山真言宗兵庫県青年教師会の僧侶からのそのような要望であったという。

仏教儀式で用いられる声明は、インドに始まり中国を経て奈良時代から平安初期にかけてわが国へもたらされた「声の音楽」である。謡曲や浄瑠璃などの邦楽に影響を与えたことから日本音楽のルーツとも言われている。

1200年近くにわたり連綿と伝えられてきた伝統的な声明と、最先端のプロジェクションマッピング——かつてない組み合わせのイベント開催に難色を示される向きはなかったかと問うと、「これまで見たことがないものですから、企画段階ではアゲインストな風もあったようです」と笑う。しかし青年教師会などの熱心な働きかけもあって、実現の運びとなった。

異色の「お題」の世界観をどういう演出で表現できるのか。ちょうどその前に奈良の明日香村で石舞台古墳などにマッピングする仕事に携わった経験が生きたそうである。明日香村の石の文化は、渡来人の影響を受けてつくられたもので、単一民族だと思っていた日本人が、実は色々なものを混ぜあわす〝マッシュアップ〟を得意とする国際的

大阪ミナミの千日前、昨今外国人に人気の黒門市場がある筋の手前に、「味園ユニバース」（写真上）の建物がある。1956年に建てられ、かつては「ユニバース」（写真左）という昭和モダンなキャバレーなども入った歓楽施設だったが、現在は、新たな世代が集うライブやアートイベントも開催され、カルチャーを育む場として活用されている。

2015年5月に開催された「高野山1200年の光――南無大師遍照金剛」。歴史ある大塔に、新たなプロジェクションマッピングの技術で本尊大日如来などが幻想的に映し出される。時空を超えた一体感を生む祝祭空間は観客を魅了した。

することで、今まで全く日常になかった空間ができあがり、高野山とシンクロしたかなと感じました。事実、声明や真言は場面を想起させるもので、目に見える現実のレイヤー（側面）とは別のレイヤーを複合させていくものだと思いますし、それによってリアリティの認識が変容するバーチャルリアリティに近いものを感じました。そういった点でも、我々が手掛けるマッピングという手法と親和性は高かったと思います」と語る三浦氏にとって特に印象的だったのは、幅広い年齢層にわたる観客の反応である。信仰篤い高齢者層から、ディズニーやUSJなどでマッピングにも馴染んだ若者層まで、表層的反応は十色であっても、ある種の一体感をもって受け止められている姿に「普段絶対に共通項がないだろうと思われる人々が、見ている側面は違うのだけれど、その先にあるものが重なって、ここまで共有できる感覚を広げられるのかと感じました」と話す。

約1週間にわたり開催されたイベントは評判を呼び、当初懐疑的な見方もあった高野山側から、「真言密教の聖地、壇上伽藍でのプロジェクションマッピングの上演は次世代のコミュニケーションの方法として、宗教や国籍の違い、信仰の有無、世代を超えて多くの皆様の心に真言密教の世界、深淵普遍の宇宙観の片鱗をお伝えできたのではないでしょうか」と評されたそうである。以前、本誌117号巻頭対談で、空海による「日本的翻訳」についてふれているが、テクノロジーを融合させて声明を現在にアップデートさせた今回のイベントに対する高野山の柔軟な受容姿勢には、開祖の精神が今に根付いている、といえようか。

三浦氏は高野山の経験を通して、ほかにも色々な気付きを得たという。

「こんなに深い世界と、現代の新しいアートや音楽、そしてテクノロジーはやはり地続きなのだ、と。実は、高野山のプロジェクトに関わるずっと前から、自然のなかに音楽、アートをもち込んだイベントに携わる先々で、山伏や修験道が担っていた精神性が地域の風土として根付いていたことに感づいていました。勿論そこには「弘法大師空海」の足取りも多分に含まれており、以来、空海の存在を意識するようになりました。誤解を恐れずにいうと、既存のシステムからドロップアウトして、新たな視座を獲得し還元するという、ある種のカウンターカルチャーの源泉のような精神性を、古代の日本に感じ取ったのです。そういった感覚は日本にはなく、海外からの逆輸入でしかないと思っていた僕にとって、実は日本の山伏にそれに近い感性があったと知ったのは発見でした。山伏は里と山を往来して、修行で得た知見を伝え、人々の生活を豊かにする役目を担っていたのです。『文化は人がつなぐもの』。機会があれば、今後、文化という観点から、こうした山伏の魅力にも迫ってみたいと思います」

大阪のもつ「グローカル」なバランス感覚の魅力

日本文化のユニークさに開眼しつつある

な民族であったと知った。現代的な感覚で見えてくる新たな発見を前提とした観点からディスカッションとヒアリングを重ね、1年余の準備期間をかけ本番を迎えた。当日の模様は前述の通りである。

「実際にやってみて、今回のイベントは〝場面づくり〟だと思いました。声明とマッピングが融合

COSMIC LABが近年開発したのが、オーディオヴィジュアルデバイス「Quasar（クエーザー）」だ。これは、動画素材を収めたキャップを円盤上に自在に配置しながら、「映像」と「音」を同時に奏でられる次世代ライブシステムである。Quasarを使った作品のひとつが「Celebrate Our Creative Roots」。「Future & Roots」をサブタイトルにもつ本作品では、日本古来の盆踊りの映像とシカゴ発の現代ダンスミュージックをクロスオーバーさせて、過去から未来へとつながっていく流れを表現している。

言葉では分かり辛いが、実際に目の前で操作してもらうと、まさに「百聞は一見に如かず」。円盤上にキャップを置くというシンプルな操作ながら、その配置の妙で映像と音楽が多彩に変化し、生命の誕生と進化していくさまを表現する。共通言語をもたなくとも感覚でその場にいる人間に訴えかける、熱量の感じられるパフォーマンスであり、海外での反応は非常に大きいとのことである。

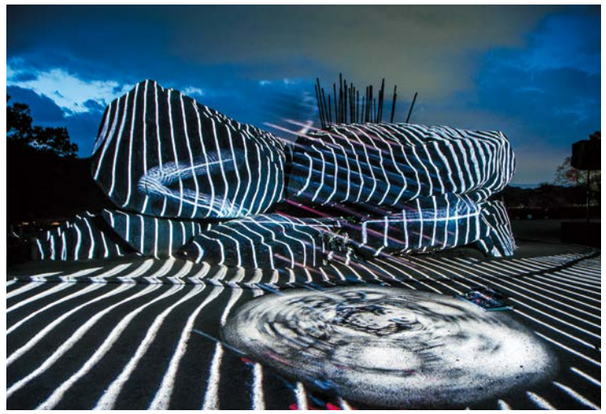
海外でも高い評価を受けるCOSMIC LABのこうしたユニークなクリエーションの源泉はどこにあるのだろうか。

それをひもとくふたつのキーワードが、【「バーニングマン」発、大阪「味園ユニバースビル」経由のアートパーティー「FLOWER OF LIFE」をその起源に持つ】というホームページの紹介文の中に込められている。

ひとつ目は「バーニングマン」。バーニングマンとは、アメリカ北西部・ネバダ州の荒野で1年に1度開催され、「奇祭」「アートで原始的な共同生活」などと称されるイベントの名称だ。何もない荒野に新たなまちをつくり、数万人に及ぶ参加者が約1週間生活を共にし、最後はすべてを燃やして無に帰して終えるというこのイベントに、三浦氏と学生時代の同級生でもあるプロジェクトマネージャーの高良和泉氏のふたりは20代の頃より参加し、多大な影響を受けているという。

次に「味園ユニバースビル（正式名称は「味園ビル」）」。先ほどもふれたように、現在の活動拠点となっているビルのことである。味園ユニバースビルは1956年建築、地下につくられたキャバレー「ユニバース」を中心に、スナック、ダンスホール、宴会場などを備えた一大歓楽施設である。高度成長期の好景気に乗って繁盛し、80年代まではミナミ千日前の歓楽街を代表する存在でもあった。その前衛的な設計意匠は当初から話題となっており、アメリカの『LIFE』誌にも紹介されている。

関西出身のふたりにとって、このビルの存在は子どもの頃からテレビ



奈良の明日香村にある石舞台古墳では、その名前の由来となった逸話をもとにしたライブ感溢れる映像演出と、ヴァイオリニストが奏でる埋葬者へのレクイエムで、観客を超時空の旅へと誘った。

独自に開発したオーディオヴィジュアルデバイス「Quasar（クエーザー）」は、キャップ状の装置一つひとつに、たとえば太鼓の音色と盆踊りをする踊り手の映像が組み込まれている。この色々な種類のキャップを、円形のテーブル上に自在に配置し読み込ませると、PC上や連動するスクリーンに、その複数のリズムと踊り手の映像が絶妙にマッチングし映し出される。

毎年、アメリカ・ネバダ州の何もない荒野に、世界各国から人が集まる「バーニングマン」のイベント。一週間の間、自給自足のような生活を送りながら、唯一「何か創造的なものを生み出す」ことに精を出す。最終日には象徴であるザ・マン（人形）を焼いて、無に還し何も残さない。
写真提供／Reiji_Isoi

CMでおなじみのものだが、実際に見たことはなかったそうだ。2001年、友人から「今、味園ビルが面白いから、ここでアートイベントをやってみないか」と誘われたときも、記憶に残るCMのイメージとアートは結びつかなかった。しかし、実物を目の当たりにして、海外のバーニングマンに刺激されていたふたりは「日本にもこんな場所があるんだ！」と大きな衝撃を受けたという。

なかでも圧倒されたのは、「味園ユニバースビル」という場に色濃く漂う「1970年の大阪万博の頃の空気感」だ。

「僕たちは万博開催のときにはまだ生まれていないのですが、その当時のポジティブな感覚がまだ大阪には残っているんです。大阪万博の時代につくられたものには、外に向かって開かれた独特の感覚があり、このビルにもそういったエネルギーを感じました。それまで日本では『この辺で止めておかなあかんかな』という壁を感じていたのですが、その壁をとっぱらった、バーニングマンのような表現がここでなら可能かな、という印象を受けました。アートやクリエイティブな部分は自発的に出てくるものなので、〝余地〟や〝隙〟が必要なんですね。だからこそ、サイクルを重ねてきた古いビルを舞台に気兼ねなく生まれてくるものもあるかな、と」（三浦氏）

「ビル内に空中ステージがあったり、今見ても驚くほどスタイリッシュでスペイシー（空間的）なデザインの内装に、そうした歴史の残り香を感じました。僕らが来たときは時代に取り残され、訪れる人も少なかったのですが、逆にこのスペースでこそ時間をかけてやりたい表現の場がつくれると思いました」（高良氏）

以後、現在にいたるまで20年近く、この味園ユニバースを拠点にさまざまな活動を続けている。ちなみに、COSMIC LABとは〝大阪市千日前〟というローカルな場所と〝ユニバース〟という名称のギャップ感覚に面白さを感じ、「ローカルを突き詰めたら宇宙的なものになるのかな」という発想から、宇宙つながりでの命名とのことである。

味園ユニバースという魅力的な場との出合いが大きいとはいえ、一貫して大阪をベースとしてきたことについて三浦氏は、「東京に対抗意識があるわけではないですが」と前置きしたうえで、大阪というまちの「グローカル（グローバルとローカルからの造語）なバランス感覚の良さ」をあげる。「もともと生まれもこちらですし、大阪のリラックスしたオープンマインドな気風が合っていると思います。あと、個人的には『ボアダムス』という、自分が好きな大阪のバンドの存在も大きかったですね。バンドの世界観がずば抜けてはいたのですが、メインストリームとは程よい距離感を保ちつつ、海外を見渡すとすごく評価されているというスタンスにも余裕を感じましたし、ローカルかつグローバルというバランスもとても良いなと思っていました」

現在仕事のフィールドは海外、東京が半分を占めるが、当面大阪を離れる予定はないという。

「やりなさい」ではなく「やりたい」を原動力に——アート&テクノロジーのこれから

先述したように、現在のCOSMIC LABのメンバーは、外国人ふたりを含む5人で構成されている。

三浦氏によれば「現在のメンバーの募集を、日本語と英語の両方で出したところ、応募者は全員外国の方でした。私たちもウェルカムの姿勢でやっています」とのこと。現在の外国人メンバーは、アメリカ人のベン・ジョンソン氏とスリランカ人のプラヴィーン・リヤナアラチチ氏。いずれもプログラマーだ。

使用言語はジャパニーズ・チューズデイとして日本語だけを使う日を設けている以外は英日半々、必ずしも意思疎通はスムーズではないが、そうした言葉の壁さえも「面白い」と楽しむ余裕が感じられる。まず、ふたりに大阪のまちの印象を聞いてみると、口を揃えて「東京よりリラックスできる」という答えが返ってきた。彼らにとって居心地の良い環境のなかで、COSMIC LABのメンバーとしての仕事をどのように感じているのだろうか。

日本に来て日の浅いベン氏は、日本語の聞き取りもまだ苦手なようだが、そんななかでも今のチームでの仕事は「チャレンジ」があっていいという。日本語を話すこと自体がチャレンジ、仕事面ではこれまでの職場では決められたやり方でのプログラミングであったことに対し、ここでは新たなやり方でプログラムを組むこともチャレンジだという。

来日して3年になるプラヴィーン氏は、前職はゲーム開発だったが今の方がやり甲斐があると話す。COSMIC LABでアートとテクノロジーの開発を学ぶなかで、今の時代は、テクノロジーは向上しているのに文化的な価値が低下していると感じるというプラヴィーン氏からは、「今後次世代に対して、文化的な価値を残していけるような何かをしたい」と頼もしい言葉が返ってきた。

では、プラヴィーン氏の弁にもあったアートとテクノロジーのこれから、たとえば次世代に向けての教育の必要性などについてCOSMIC LABではどう考えているのだろうか。

これについて、3年前よりチームでモーショングラフィック（映像制作）を担当している西尾健志氏の場合を見てみよう。西尾氏は鳥取県出身。地元でひとりでVJやプロジェクションマッピングなどの映像に関わる仕事をしていたところを、COSMIC LABに誘われてチームメンバーになったそうだ。映像に興味をもち、仕事にしたいと考えたときに、専門学校などには行かず独学で学んだという。独学とは非常にハードルが高く聞こえるが、西尾氏によれば「ウェブの存在が大きかった」とのことであり、ウェブ上に公開されているチュートリアルで勉強して、プロジェクションマッピングも習得したという。

「今はウェブ上にコードシェアのサイトやチュートリアルサイトが充実しています。モチベーションが高い人にとっては学習の機会が得やすいですし、高い自主性をもっていれば学べる場はたくさんあって、そこが面白いと思っています。『アート&テクノロジーの教育制度の整備を』といった話もありますが、『やりなさい』ではなく、誰に言われることもなく自分でやっていく、自発的につくりあげられるカルチャーに惹かれます」という三浦氏の言葉に、高良氏も頷きながら、次のように続けた。

「我々は学ぶ場所がなかったから、自分で勉強してきました。自分たちで学んだからこそたどり着いた世界だと思っています。教育は大事ですし、学べる環境を整えることも重要ですが、『やりたい』という自分の欲求をいかにして実現させるか。そこに労力を注いで、モチベーションを刺激していく方が大事。まず自分のカッコいいとか面白いという思いがあって、初めてそういうところにたどり着く。むしろ、そういうことを体験する場があるかどうかが重要だと思います」

おわりに

三浦氏と高良氏にとって、「実際に見てはいないが、その存在は大きい」という1970年大阪万博に続き、2025年に再び大阪での万博開催が決定している今、それらを視野に入れた今後の展望を伺った。

「360度映像に包まれた空間をつくれたら、と考えています。たとえばガスホルダーのような球体空間で、祝祭的な映像表現に挑戦してみたいと思います」（高良氏）

「大阪を拠点にしつつも、さまざまな国であったり、文化的・技術的背景をもつ人々とチームをつくって、異文化を多角的に面白がって再定義するようなプロジェクトも展開してみたいですね。〝Quasar〟を進化させたデジタルアートのフォーマット上で、世界中のお祭りの要素を混ぜあわせて、リアルとヴァーチャルの境界がなくなるような次世代の祝祭空間をつくり出してみたいです。

それから、日本で独自に進化を遂げてきたデコトラアートともコラボレーションしてみたいです。近年はハイブランドの広告に起用されていたり、漸く世界が気付きだしたリアルなクール・ジャパンだと思います。やはり自分はインディペンデントな（自発的な）カルチャーが好きなんです。

あとは、半径が小さくとも、好きなことを自由に表現・交感できる場としてのコミュニティの活性化を目指したいです。カルチャー、ビジネス共に、自分たちの原点はそこなので」（三浦氏）

COSMIC LAB
コズミック・ラブ
VJ・ディレクターの三浦泰理氏が代表を務め、アーティスト／クリエイターがコラボレートするミックスメディア・プロダクション。アートとテクノロジーを結びつけ、デジタルシステムまでを作品に昇華した未知なるヴィジュアル&オーディオの体験を探求し続けている。代表作「高野山1200年の光」は第2回JACEイベントアワード超世代アート賞を受賞。2017年のカザフスタン・アスタナ国際博覧会において、日本館の特別コンテンツを手掛けるなど、幅広く活躍する。

未来を考える——2

科学技術が人間を自由にする技であるために

日本の未来を考えるうえで、避けては通れない教育問題。社会が成熟し、イノベーションを生み出す人材がますます求められる現在、専門性ばかりを重視したこれまでの大学教育とは異なるアプローチが必要ではないだろうか。そこで今回は、理工系の大学でありながらリベラルアーツ教育を充実させる、東京工業大学の取り組みを紹介する。その理念や内容について、リベラルアーツ研究教育院長の上田紀行氏にお話を伺った。

インタビュー

上田紀行
Ueda Noriyuki
［東京工業大学リベラルアーツ研究教育院長］

脇坂敦史＝構成
西田香織＝撮影

評価ばかりを求め、質問をしない学生たち

私が東京工業大学に着任したのは1996年、バブル崩壊後のことでした。そのとき印象的だったのは、授業中の質問がとても多いこと。さすがに頭のよい子たちは違う、と驚いたものです。ところがその雰囲気も20年間で失われていき、授業で積極的に発言をするような学生は減り続けました。かわりに増えたのが、レポートでも試験でも評価ばかり重んじる学生たちです。批判的な鋭い質問のかわりに、「先生、このレポートの評価軸は何ですか?」といったことばかり訊かれるようになった。「もっと質問してください」と促しても、「どんな質問をするのがよいのですか?」と逆に問われてしまう。自分が何をやりたいか、自分が何を知りたいかよりも、自分はどう評価されるか、を考えずにはいられないのでしょう。

これには社会的な背景もあり、実は学生だけに限った話ではありませんでした。学校の教師も会社員も、誰もが厳しい評価の目にさらされるようになっていた。評価されない、役に立たない、無駄なことは誰もやらない。そんな時代になってしまったのです。

この20年くらいのあいだ、どこの大学でも社会に出てすぐに役立つ「即戦力」の育成が求められてきました。専門教育を前倒しする大学が増え、大学院の重点化も行われた。「大学の国際競争力を高めよ」などと言われ、大学も評価を求めて時流に乗った改革をつぎつぎと進めてきたのです。

今、振り返ると、やるべきこととまったく逆のことをやっていたのかもしれません。日本は成熟社会を迎えており、成熟社会だからこそのよさを出していくべきだったのに、自らがもつ文化の底を浅くしてしまうようなことをしていたのです。たとえば最近の日本では、どうも社会を変えていくようなイノベーションを起こす人がなかなか出てこない。それも、こうした教育の現状と関連があるのではないだろうか? そんな疑問を抱く人たちが増えてきたのだと思います。他人がつくった問題は解けるが、自分で問題をつくれない学生たち。彼らは、この世の中にどんな問題があり、自分は何に取り組もうか、という根っこの部分が弱い。問題を解いたり、課題をこなす能力はあっても、常に指示待ちという人間が大量に社会へ送り出されてきたのです。でも、画期的なイノベーションを起こしていく人というのは、答えを導く人というよりも、「自ら問いを立てることができる人」です。

それに今はサクセス（成功）よりも、レジリエンス（回復力、復元力）の時代だと私は思います。東日本大震災のような災害だけではありません。事業の失敗や不祥事……個人的にも、親が倒れて介護しなければならないとか、離婚してひとりで子どもを育てるとか。思ってもいなかった挫折から、どうやって立ち直るかが大切になってきている。ところが、専門分野のなかだけで効率的な勉強をして、単線的に成功してきた学生たちは、失敗して新たな分野に挑戦したり、なんとか脱線から立ち直ったりする力が弱くなってきている。

こうした反省から高まりつつあるのが、リベラルアーツ（教養教育）です。私たち東工大だけでなく、日本の大学全体で「教養力の見直し」ということが言われ始めているのです。

「東工大立志プロジェクト」での、大人数講義。池上彰氏をはじめ、錚々（そうそう）たる講師陣が顔をそろえる。

リベラルアーツとは、人間を自由にする技術

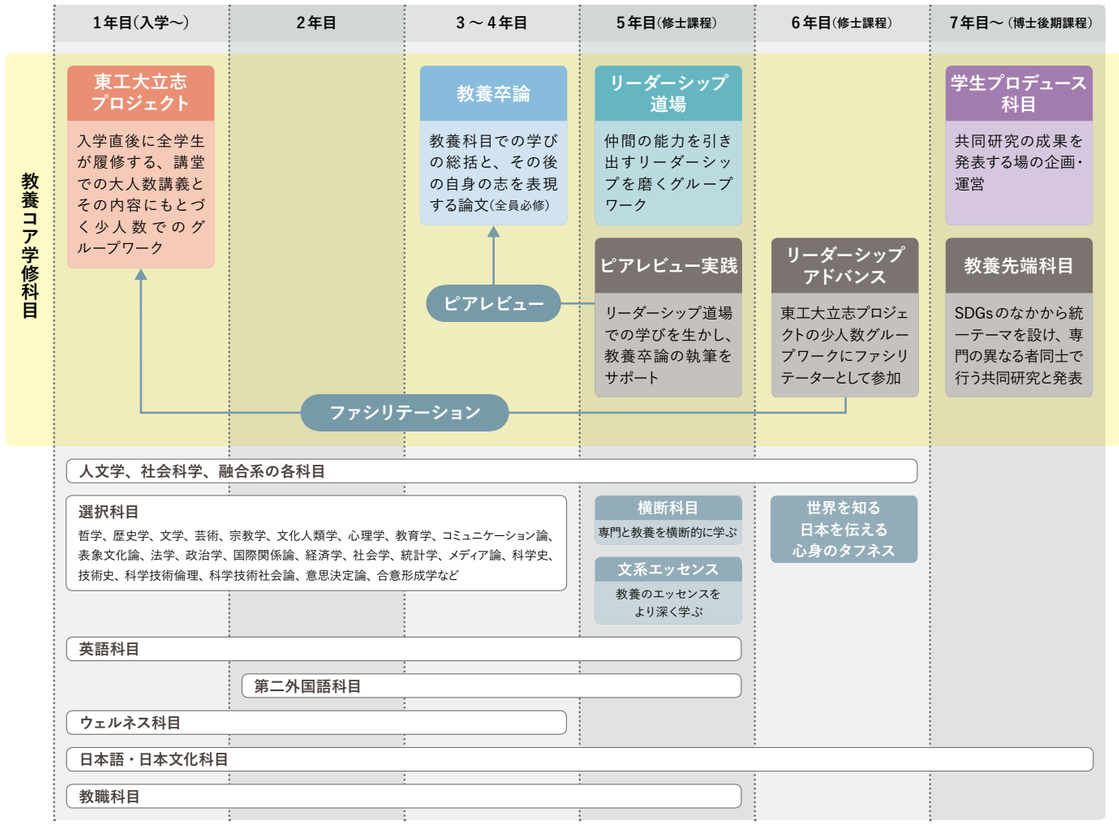
2000年にノーベル化学賞を受賞した白川英樹氏は、学生時代に東工大で出会った作家の伊藤整（英語）や鶴見俊輔（哲学）、川喜田二郎（文化人類学）、宮城音弥（心理学）、永井道雄（教育社会学）といった先生たちがもつオーラに圧倒され、大きな影響を受けたというエピソードをしばしば語っています。このように、もともと東工大はリベラルアーツに力を入れていた大学でした。学長として終戦を迎えた和田小六という工学者が敗戦を振り返り、「ものごとを複眼的に見ていく力がなければ、これからの工学はだめ」ということで、MIT（マサチューセッツ工科大学）を模範とした大学改革を行いました。「著名ではあるが一匹狼みたいな文化人」タイプの教授は、このときから採用されることになったのです。

そもそもリベラルアーツとは、大学の専門分野の下にあるという課程でもなければ、理工系大学における文系科目のことでもありません。リベラル＋アーツ。つまり人間を自由にする技術こそが、リベラルアーツだと私は考えています。リベラルアーツの起源は古代ギリシア・ローマ時代に遡ります。当時の共同体、たとえばポリスには自由市民と奴隷がいました。自由市民は自分の頭でものを考え、よきものを追求しながら、ポリスの未来を決めていく人たち。一方の奴隷は、自由市民が考えたことを実行する。だから奴隷は、自分の頭でものを考えなくてもよい。自由市民がもつべき素養が「自由七科（文法学、修辞学、論理学、算術、幾何、天文学、音楽）」と呼ばれるリベラルアーツでした。

現代を生きる私たちは一見すると自由ですが、本当にそうでしょうか? よきものを追求しながら、自分の頭でものを考えているというより、日々誰か別の人が考えたことに従って生きているのではないでしょうか? 評価軸のはっきりした課題を与えられないと何もできず、「レポートのタイトルは自由、字数も自由にしてください」と言われて困惑している学生だけではありません。たとえば、給料をもらって会社で働いているサラリーマンにも奴隷的な部分があります。それは大学の教員である私も同じで、決められた期日までにこの書類を書け、などと言われて日々奴隷的な仕事にも追われています。

問題なのは、いわば社会のどこにも自由市民が

■東京工業大学のリベラルアーツ教育の仕組み



東京工業大学のリベラルアーツ教育は、理系の専門科目と並行して行われる教養科目を中心としたカリキュラム。学部1年生は「東工大立志プロジェクト」からスタートし、「文学」「政治学」「科学史」や英語、第二外国語といった科目を履修していき、学部3年生の「教養卒論」で自身のリベラルアーツ教育の成果をまとめる。修士課程以降は、リーダーシップ力を養う授業や、専門分野を超えた共同研究授業が用意されている。

いなくなってしまったことです。かつて企業のトップには、しばしば松下幸之助や本田宗一郎のような、すごい自由市民がいました。その下で働く人たちは奴隷的な仕事をしていたかもしれませんが、偉大な経営者の人格から薫陶を受けながら、やがて自由にものを考える術を身につけていったものです。

ところが今の経営者は、四半期の業績や日々の株価といったものによって、誰よりも自由のない、最もその仕事を厳しく評価される「奴隷」になってしまった。企業のトップから下っ端まで、誰もが「奴隷」になってしまったら、どうなるのか？ 近年、かつては一流企業と呼ばれた会社で、つぎつぎと信じられないような不正が明るみに出ています。そして、社会が求めるようなイノベーションも思うように生み出すことができない。その背景には、こうした大きな変化があると私は考えています。

こうなってくると、共同体は滅びていかざるをえない。だからこそ、「自由にする技」というものを学生のときから学ぶことが大切です。私たちがつくった新しいリベラルアーツ教育のカリキュラムは、単に教養をつける、知識を増やす、といったことではなく、自らの頭で考える自由な学生を育てることを最も大きな目的に据えています。社会をこういう風に変えていきたい。こんな人間になりたい。そういう内発的な力をもつこと。それが人間が自由であるということであり、東工大ではそれを「志」と呼んでいます。

東工大で始まった「志」をつくるためのカリキュラム

2016年度から東工大で導入された入学直後の必修科目「東工大立志プロジェクト」では、池上彰氏や平田オリザ氏ら著名な講師陣から、「僕が言ったからといって、鵜呑みにしちゃだめだよ！」といったアジテーションを織り交ぜた刺激的な講義をたくさん受けることになります。また、約30人のクラスに分かれ、そのなかで少人数グループをつくり、たとえば前週に受けた池上氏の講義について書いたレポートを輪読しながら、講義を聴いて何を感じたのかを話し合うのです。

この少人数グループは、あえて専攻する分野の違う学生たちが混ざり合うようにつくりました。そのことによって、自分とは異なる適性や進路をもっている学生からも刺激を受けられるよう工夫したのです。

大学に入ると、学生たちは普通100人以上の学生が聴講する大人数講義を経験します。学生時代の私もそうでしたが、こうした大教室の授業では、たとえ自分がいてもいなくても同じだな、と感じてしまいます。これでは、大学が「あなたがいなくても世界はまったく同じように進んでいく」というメタメッセージを、朝から晩まで流し続けていることになってしまいます。

ところが、リベラルアーツ教育を通して私たちが学生に求めているのは、まったく逆のこと。自分がここにいることで何かを変えていく、自分が発言をすると何かが変わる。それを感じてもらう必要があるのです。少人数グループによるアクティブラーニングの重要性は、ここにあります。

それまでやってきた試験勉強との違いを感じてもらうことも大切です。まず、正解はひとつではないこと。グループに4人いれば、同じ講義を聴いても別のところにフォーカスし、違うことを考えているのが普通です。そして、こういう学びの場は優れた人がいればいるほど相乗効果を発揮して高め合い、活性化する。もはや、隣の人よりも高い点を取ることが目的ではないのです。

批判的思考の重要性を説いた授業と、少人数グループでのディスカッション。それを何週間か繰り返した後、夏休みの前には自分がここで何を学び、何を志しているのかをまとめ、発表します。この「東工大立志プロジェクト」は、いわば東工大流リベラルアーツへの最初の洗礼といえるもので、その後、学生たちはそれぞれが選択した多様な教養科目を学んでいくことになるのです。

いたるところに人と人の出会いをつくりだす工夫をした

入学直後の「東工大立志プロジェクト」をともにしたメンバーは、3年の後期に再び集い、「教養卒論」を書きます。これは次の年から始まる本格的な研究生活を前に、自分が取り組もうとしている理工系の学問分野で何をしたいのか、やはり「志」を問うものです。自分が取り組むであろう研究は、地球や社会にどのような貢献ができるのか？ 困っている人の何かを救うのか？ あるいは、自分はその学問のどこにわくわくするのか？ 3年間で学んだリベラルアーツの知見を生かしながら、5000〜1万字くらいでまとめます。

論文の執筆は、異なる分野に進んだ仲間たちとつくった少人数グループで、互いに批評し合いながら進めていきます。さらにファシリテーターとして、リーダーシップの実践を積んできた修士課程の学生たちも参加します。年齢やバックグラウンドの異なる学生たち。こんな風に、いたるところにさまざまな人と人の出会いをつくりだすということが意図されているのも、大きな特徴です。

少人数のグループワークは、円卓がわりのダンボール「えんたくん」を膝に載せ、議論の内容を落書きのようにメモしながら進める。

人と人のぶつかりあい、共同作業のなかで何かが生まれていくということを強く出したいと思ったからです。

そして東工大の学生は約9割が修士課程に進みますが、専門性の高まる修士課程においても、先ほど触れたリーダーシップを学ぶ授業があるほか、博士課程では「教養先端科目」が用意されています。専門分野を超えた少人数のグループで、SDGsをテーマに（昨年は貧困、今年は平和）共同研究を行うものです。留学生や社会人の学生も多いので、すべて英語で行われます。

文系の大学でも理系の大学でも同じですが、修士課程ともなれば研究室にこもり、他の専門分野の人の考えに触れる機会はなくなってしまうのが一般的です。けれども今回の改革によって、東工大の学生たちは6年間を通してリベラルアーツを学び、自分とは異なるさまざまな考えをもつ人たちといつも出会うことができるようになったのです。

「華のある」教員を集め、大学の「教養劇場化」を目指す

こうした改革の司令塔となったリベラルアーツ研究教育院には現在、59人の常勤教員がいます。人事において大切にしたのは、「華のある」教員に来てもらうこと。東工大には、歴史や地理が嫌いだから、文学なんか読みたくないからこの大学を選んだ、という学生がたくさんいます。だから、意識的に「人を動かす魅力的な言葉」をもっているような研究者ばかりを集めているのです。

たとえば、2018年度のNHK『100分de名著』という番組には國分功一郎氏、若松英輔氏、中島岳志氏が解説として出演していますが、ほかにもしばしばテレビ出演をするような学者が多い。彼らは、論文を書いてその分野だけで知られていて、象牙の塔にこもって生きているような学者とは対極にいる人たちです。

東工大の学生たちは頭がよくて、論理力がある。だから、こういう先生たちにとっても、授業をするのはやりがいがあるし、楽しいのです。錚々たるメンバーが集い、その評判が広まるにつれて、ますます多くの意欲的な先生たちから「東工大のリベラルアーツ教育に参加したい」と言ってもらえるようになりました。

もうひとつ重視したのは、大学の「教養劇場化」です。これは何かというと、「東工大立志プロジェクト」での4、5人の学生たちのグループが、教室の外へ出ていって議論を続けているような状況をつくることです。構内の芝生やカフェテリアのあちこちから、「原発は本当に必要なんだろうか？」とか「そもそも平和って一体何だろう？」といった話が聞こえてくる。大学全体に、何か新しいものをつくりだしていくというエネルギーを横溢（おういつ）させ、この大学はこういう話をしてもいい場所なんだ、という感覚をつくっていく。

改革が始まってからまだ3年目ですが、私自身は大きな変化を感じています。まず、授業のなかで質問をする学生が劇的に増えた。この20年間でぴたりと止まってしまった質問が復活したのは、本当に嬉しい。「東工大立志プロジェクト」の授業を通して批判的思考を学んだこともありますが、「どんな質問をしても許されるし、意味はあるんだ」というような、大学という場への信頼が形成されつつあるのが大きいと思います。

そして何より驚かされるのは、文系の本を読む学生が増えたこと。「東工大立志プロジェクト」が行われる4月と5月の生協書籍部で売れた人文社会書の数は、改革前の2015年度が75冊でしたが、2016年度には786冊、2017年度には1731冊となりました。直接的な理由としては授業で書かなければならない「書評」の課題図書として購入されたものが多いのですが、それでも驚くべき変化でしょう。

池上彰氏が授業のなかで「4年間で100冊は読みなさい」と言ったり、ジャーナリストの佐々木紀彦氏が「スタンフォードでは学生たちが400冊くらい読んでいる」などと話したりしているので、その刺激もあるでしょう。もちろん一部の学生ではありますが、本気でそのくらい読もうとしている学生が、私の印象では学年に40～50人くらいはいます。

ディスカッション力とともに、プレゼンテーションの技術を磨くのも、授業の目的のひとつ。

科学技術が人間を自由にする技になりうるか？が問われている

ちょうど今、学生たちから提出された「教養卒論」を読んでいるところですが、期待していた以上に優れた論文が多く、やはり成果の大きさを実感しています。社会をどう変えていきたいのか、という「私」を主語にした問題提起がしっかりとなされている。そして専門用語に頼らない、ほかの分野で学ぶ学生にも届くような分かりやすい文章で書かれている。こういう学生が増えていけば、きっと日本も変わっていくのではないか。そんな希望を抱かせてくれます。

とはいえ大学のなかで最も変わるスピードが遅いのは、実は教員たちです。東工大のなかでも、すべての理工系の先生たちが改革に好意的というわけではないことは理解しています。今、東工大でリベラルアーツを学んでいる若い学生たちが研究室に入っていくと、どうなるか？　さらに言えば、大学を卒業した後、企業に就職した学生たちは、どうなるのか？　それはまだ分からないし、そこにリベラルアーツ教育の未来がかかっているのではないかと感じます。

「この実験には何の意味があるんですか？」「このプロジェクトが成功すると、社会の何が変わりますか？」

そんな質問をしてくる、いわば一言多い学生たちに「いちいち面倒なことを言うな」とか「できるようになってから考えろ」とか、そんな風に応じる先生がいるかもしれない。今の研究室は、どこでも短期間で成果を出して外部から資金を取ってこなければならないという状況に置かれていて、教授といえども中小企業の社長みたいな立場にあります。

しかし一方で、研究の意義を説くプロジェクトペーパーの第1章を書くときに必要なのは、まさに未来社会とつながっていくためのヴィジョンです。彼らのように生意気な学生たちがもっている能力こそ必要なのだ、と気づくこともあるかもしれません。こうして、リベラルアーツの重要性により多くの教師たちが目覚めていく……。改革の第2ステージとして、私が密かに期待している展開です。

東工大でリベラルアーツ教育をやっているというと、科学技術とは関係ないものにも力を入れているのだなと多くの人に思われてしまう。けれども、リベラルアーツとは決して文系科目のことではありません。むしろ科学技術全体がリベラルアーツになりうるか？　科学技術が人間を自由にする技、技術になりうるか？が問われているのだと思います。

科学技術を扱う人間は、最先端の技術、機械、AIといったものを当たり前に使うわけですから、普通の人よりも数十倍、数百倍もの影響力を社会に対してもつことになります。それを何のために使うのか？　兵器をつくるのか？　苦しんでいる人を救うのか？　誰かを隷属させるために使うのか？　AIのようなテクノロジーと人間の悲劇的な未来予測を描いた『ホモ・デウス』という本が今、話題になっていますが、それこそがリベラルアーツを学んだ自由市民が考えていかなければならない課題でしょう。

リベラルアーツを学び、問題を自ら問うことのできる学生たちが卒業した後、たとえば就職した企業の側に、彼らを迎えるだけの度量があるだろうか？　たしかにそれは心配ですが、彼らの「自由に考える力」がそれを乗り越え、新たな活力を社会に吹き込むことになると期待しています。

リベラルアーツ研究教育院のパンフレット。スローガンでもある「志」の文字が大きくあしらわれる。

上田紀行
うえだ・のりゆき
1958年、東京都生まれ。東京工業大学教授。専門は文化人類学。「癒し」の観点を早くから提示し、生きる意味を失った現代社会への提言を続けるとともに、日本仏教の再生に向けた運動にも取り組む。東京工業大学では、講義にディスカッションやワークショップを取り入れるなどの試みにより、学生の授業評価が教員中第1位、2004年の「東工大教育賞・最優秀賞」を授与される。2016年に新設されたリベラルアーツ研究教育院の院長をつとめる。著書に『生きる意味』（岩波新書）、『ダライ・ラマとの対話』（講談社文庫）、『人間らしさ』（角川新書）ほか多数。

「ルネッセ」を総括する
――2年間の活動を振り返って

池永寛明
Ikenaga Hiroaki

加藤しのぶ＝構成

本誌115号「都市・地域のルネッセ（再起動）に向けて」での提言から始まった「ルネッセ」。理念でもあり実践的行動でもある「ルネッセ」は、さまざまな分野に活動領域を広げ、多くの方々と互いに知的交流を続けながら、未来へつながる実りを生み出してきた。今号では、その総集編として、提唱者でもある池永寛明大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所所長が「ルネッセ」を総括するとともに、「ルネッセ」に関わりのある方々からの寄稿やインタビューを掲載し、2年間の活動を振り返る。

『文化』とは何か？
――すべてはここから始まった

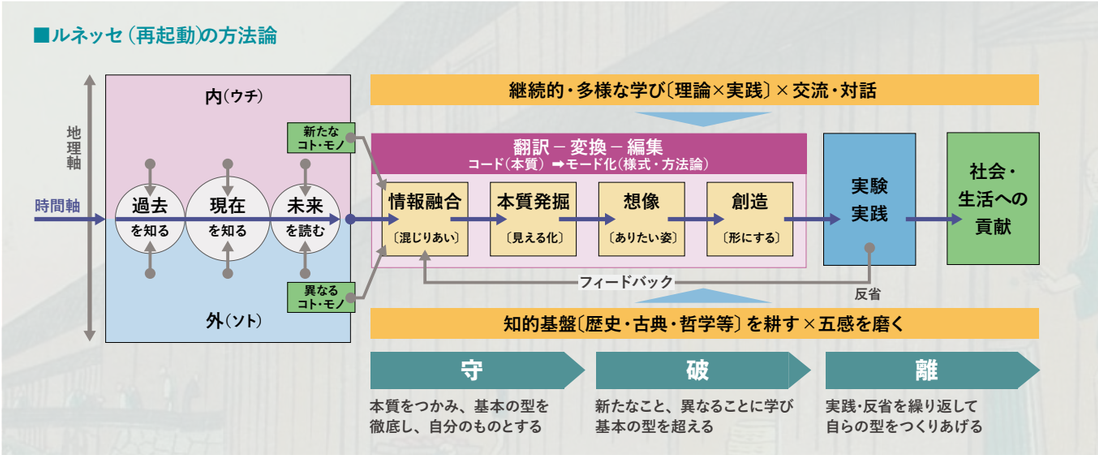
2016年4月に着任して最初に思ったのは、「エネルギー・〝文化〟研究所」の「文化」とは何だろう、ということでした。

文化とは、芸能、文学などと捉えられがちですが、芸術や作品それ自体を指すのではありません。文化の語源は“cultivate”で、「栽培・耕作」を意味します。土地を耕し、種を蒔き、水・養分を与え、収穫し、取り出した種をまた植えるという人の営み、つまり、文化には人間が何らかの活動を繰り返し、承継していくことに本質的な意味があります。

そして、環境や道具の変化に伴い「栽培・耕作」の方法が変わっていくように、文化も環境や時流に合わせて姿を変えていきます。しかし、すべてを変えるのではなく、「本質」を残しながら、最適化・洗練化していくのが承継の本来のあり方です。

このように文化本来の意味を捉え直すと、現代社会のゆがみの原因が見えてきます。何でもかんでもイノベーションを志向し、「違うこと」「別のもの」を求め続けた結果、本来受け継ぐべきものを残せず、「本質」が見えなくなってしまった。現代社会がこれまでの価値観や規範・制度とさまざまな場面で適合不全を起こしているのは、本来受け継ぐべき文化の「本質」を見失ってしまったからではないでしょうか。

停滞する日本を再び活性化させるため、失った「本質」を現代に取り戻そうと、私が提唱したのが「ルネッセ（Renesse）」です。ラテン語の「再び（ren）」と「実在する（esse）」を掛け合わせた造語で、私たちの生活文化の基盤である都市・地域社会がもっていた「本質」を過去から掘り起こし、現在に合わせて再起動することで、新たな価値を創造しようというものです。



そのための方法論を確立すべく、スーパー・アドバイザーとして協力を仰いだのが松岡正剛さんです。まず、松岡さんからは「過去から現在の1000のキーワード」をあげよとのお題をいただきました。そこで、CELの研究員とともに、都市計画・インフラ、交通、食、教育といった大テーマを過去から現在のさまざまな時間軸で縦横無尽に切りながら、キーワードをあげていく作業に取り組みました。

何もないところから1000ものキーワードを考えるというのは大変な作業でしたし、改めて見直すと、今ならもっと違う言葉にするなと思うものもありますが、スタート時に自分たちの考えを再定義できたことは、非常に有意義でした。「ルネッセ」の原点はここにあると思っています。

そして、松岡さんからは、3回にわたる巻頭対談で多くのことを学ばせていただきました。日本的な学びのプロセスともいえる「守・破・離」の思想が、編集工学の基本的な思考法であること、そして「守」の説明に「〝型〟は思ったよりも自由だ」とあったことが印象的です。これにならい、「ルネッセ」も自由な方法論で進めようと思いました。

こうして始動した「ルネッセ」ですが、もちろん最初からすべてが見通せていたわけではありません。進めていくなかでいくつかの方法論が浮かび、そこから広がり、新たな視点が見つかるという作業を繰り返しながら今につながっていったと感じています。

フェーズ1
過去と現在をつなぐ
――「現在の視点」に立つ重要性

「ルネッセ」の方法論の基礎は「過去と現在をつなぐ」ことです。ここで重要なのは「現在の視点から過去をつなぐ」こと。過去を追う研究者はいますが、ノスタルジーに浸りがちです。私たちは日本を捉え直すために、現在の視点で過去を見返し、今とコンテクストがつながっているもの、つながっていないものの整理・考察をしていきました。

そのなかで「場」――都市（まち）を問い直す（116号）、「交」――交流（つながり）を問い直す（117号）、「耕」――文化を問い直す（118号）という切り口が生まれました。研究員と意見を交わしながら、結果としてとてもいいテーマを選定できたと思っています。

こうした切り口をもとに刊行した各号では、毎回新たな知見や気づきがありました。

まず、「場」がテーマの116号では、「大阪くらしの今昔館」の谷直樹館長と、構匠の三浦史朗さんが宮城県気仙沼市でされた対談が印象に残っています（「震災が問う社会と『場』」）。被災地における復興、極端に言えばゼロベースで考えていく観点から、歴史や過去の「本質」を承継することの重要性を学びました。またこの対談がきっかけで、気仙沼の復興とまちづくりをテーマに、被災地でコミュニティ再生に取り組む吉田千春さんを講師に迎えてルネッセ・セミナーを行うなど、新たな交流が生まれています。

テーマを「交」とした117号では、現代における「講」を研究されている長谷部八朗駒澤大学学長と、奈良で土木や伝統建築などを手掛ける尾田栄章さん（㈱尾田組会長）の「講的なもの」に関する対談が興味深かったです（「『講』的集団とかつてのインフラ事業に学ぶ『交』のあり方」）。なかでも長谷部先生が、「講」が歴史の文脈で語られるものでなく、現代の日本社会でも必要なもの、と話しておられたのが忘れられません。

「耕」をテーマにした118号は、「ルネッセ」にたびたびご登場いただいているイタリアンシェフの永松信一さんと、映画制作などに携わる小倉美恵子さんの対談です（「人と人、人と風土をつなぐ食文化」）。ここで感じたのは「実践することの迫力」。永松さんが30年近く、食を通してイタリアと日本をつないできた活動の迫力、小倉さんが地域を掘り起こして映像として残していくという迫力、まさに過去と現在をつなぐ実践の重要性をここで学びました。

フェーズ2
内と外、日本と世界をつなぐ
―「ルネッセ」を物語る言葉との出合い

116～118号で日本を深掘りしていくなかで、この国の大きな問題として、自国（内）にはある程度詳しいけれども、外国（外）への関心が薄いということが浮かび上がりました。そこで次は外へ目を向け、世界で独自の存在感を示す国に学ぼうと、「外に学び、つくり直す」ヨーロッパ編（119号）、アジア編（120号）として、課題解決に向けた実践のあり方について考えました。

ヨーロッパ編では、イタリア、オランダ、デンマークを訪れ、世界各国の多様なカルチャーをもつ学生を集めて議論している現場を目の当たりにしました。日本がいかにその辺りが弱いかということも痛感しましたが、デンマークのデザインスクールCIIDのCEOシモーナ・マスキさんのメッセージは衝撃的でした。

「技術と社会をつなぐのは『文化』であり、多様な『文化』の融合です」

過去と現在、内と外をつなぐための方法を探るなかで出合ったこの言葉は、まさに「ルネッセ」を物語る一番の言葉だと思っています。

アジア編では、今、猛スピードで進化し続けている中国・深圳（しんせん）と、国家をあげてSTEM教育に取り組むシンガポールを訪れました。ものづくりのスピードの速さに圧倒され、どちらの国からも貪欲に成長しようという熱量に大いに感銘を受けました。ですが一方で、「文化力」がそれに追いついていないようにも感じました。翻って今の日本の状況は、独自の「文化力」をもちながらそれを生かしきれていないだけで、私たちにもまだまだなすべきことがあるのではないかと改めて気づかされました。

広がり、展開していく「ルネッセ」

2年にわたる「ルネッセ」の実践を通して、私たちがなすべきことが具体的に見えてきたように感じています。

まずは「情報を多角的に集めること」。都市や地域がもっていた「本質」を再起動するためには、まずそのもととなる情報を集めなければなりません。その情報の断片を融合し、混じりあわせることで、新たな価値をつくりだす下地を生み出せるのです。その情報を集めるための力、そして想像力を働かせるのに必要なのが「五感」なのではないかと思います。

次に「学びの多層化」。「五感」を養い、想像力を働かせるための源泉を鍛えるためには、学びの場が必要です。それには、さまざまな領域の知が集い、世代や立場を超えた人々が混じりあって学ぶ場が必要なのではないでしょうか。「ナレッジキャピタル大学校」はその好例といえるでしょう。最近では、江戸後期の大坂商人で浮世絵師、戯作者でもあった暁鐘成（あかつきかねなり）が知の交換・共有の場として行った「汁講」を復活させた「現代版『汁講』」を開催し、手ごたえを感じています。

最後は「翻訳・編集」する力。これが一番重要で、多様な情報を得て、学びながら現代に新たな価値を創造する作業が必要になるわけです。つまり掘り起こした本質（コード）をライフスタイルなりビジネススタイルという形で、現在に通じる様式・方法論（モード）に変換していかなければなりません。それはベースとなる基盤、プロトコルのようなものがあって成立するものです。変換という翻訳・編集する力をつけることが大事になってきますが、そのために必要なのもやはり「五感」なのではないかと私は考えています。

そもそも日本人は「五感」を働かせて外からの情報やモノ、コト、技術を感性によって磨きあげ、洗練や心地よさを生み出してきました。その感性こそが「五感」です。今、失いかけつつある「五感」を取り戻すための取り組みが必要なのではないでしょうか。

そして、「ルネッセ」の活動を通して多くの方々と交流を深め、挑戦的な実践の場の数々を生み出したのは大きな成果でした。「大阪くらしの今昔館」と産経新聞社と協力して開催した「上方生活文化堂」は、過去と現在をつなぐ場として「ルネッセ」の実践例となりましたし、「ルネッセ」に関わる多くの人が参加した「ナレッジキャピタル大学校」は、大阪の学びの源流を明らかにしながらそれを現在に再現した新たな学びの場の創出となったと感じています。

また、「ルネッセ」に共感してくださる企業との新たな交流が多く始められたことも予想外の収穫でした。たとえば、大阪寿司の復権と発展を目指している㈱Mizkan（大阪支店）、自転車のある暮らしで人がもつ力を発揮させたいと願う㈱シマノといった企業と「ルネッセ」の視点を通してつながっていけたことは、私たちがなすべきことの実現に大きなエネルギーとなると思いますし、そういう輪がますます広がることを願っています。

次からは「ルネッセ」の活動に関わってくださった方々の寄稿や談話をご紹介します。ここからも、私たちの蒔いた小さな種が大きく咲きはじめていることを感じていただけるのではないでしょうか。

「上方生活文化堂」開催のきっかけとなった「外国の皆さまと考える“和の住まい文化劇場”――上方の生活文化を感じる1日」（2017年）での書道のワークショップの様子。

「ナレッジキャピタル大学校」は「学校や社会の枠組みを超えた新しい学びの場」づくりを目的として行われ、「ルネッセ」に関わる人々も多く講師として登場した。

vol.116

vol.117

vol.119

vol.120

ルネッセ総括

過去の生活文化を掘り起こし未来を考えるきっかけに

谷直樹 Tani Naoki

上方の生活文化・建築文化の研究を通して、日本の伝統文化の魅力を伝えてきた「大阪くらしの今昔館」の谷直樹館長。過去の学びから現在、未来を考えようとするその姿勢は、「ルネッセ」の理念と共鳴するものだ。これまでにCELと連携して行ってきた多くの活動を振り返りながら、成果や今後の展望を語っていただいた。

住まい文化をテーマにした「大阪くらしの今昔館」

36年前、私は国立民族学博物館の梅棹忠夫館長が主宰する『Seventy-seven keys to the civilization of Japan（日本文明77の鍵）』の出版プロジェクトに参加した。この本は、日本で開かれた世界の有名ホテルの総会に合わせて作った英語版の日本案内である。「日本人はどこからきたか」「自由都市」「大坂」「黒船」「テレビ」「ニュータウン」など日本の歴史のキーワードを世界的・歴史的パースペクティブの中でとらえ、外国人に理解してもらうことを目的に編集された。併せて日本人自身が見落としてきた日本文明の姿を明らかにしようとする、当時としては画期的な企画であった。

2001年、大阪の住まい文化をテーマにした「大阪くらしの今昔館」（大阪市立住まいのミュージアム）が開館した。私は、館長として梅棹プロジェクトで学んだことを応用することにした。「住まうこと」を通して、「歴史に学び、世界と比較し、現代を知り、未来を考える」というコンセプトを展示の基本に据えた。当初は日本人来館者だけであったが、2003年の観光立国宣言以降、政府による海外からの観光客誘致が実を結び、今昔館でもインバウンド（訪日外国人旅行者）が増えてきた。また2013年に「和食：日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録されて世界的に「和の文化」が注目された結果、和の住まい文化への関心も高まっている。

たに・なおき
1948年生まれ。「大阪くらしの今昔館」館長。大阪市立大学名誉教授。専門は、建築史・居住文化史・博物館学。今昔館の先駆的な企画・運営で日本建築学会賞および同教育賞などを受賞。著書に『町に住まう知恵――上方三都のライフスタイル』（平凡社）など。

CELと共同で行った外国人のための住まい劇場

こうした状況の中で今昔館では、2017年、内閣官房の「オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査」の採択を受け、「外国の皆さまと考える〝和の住まい文化劇場〟――上方の生活文化を感じる一日」が開かれた。これは今昔館の再現町家と、地元にあって今も生活の場である吉田家住宅（1921年建築、国の登録有形文化財）を舞台に、外国の方と大阪の「和の住まい文化」を再発見する試みである。イベントに際して、今昔館と連携協定を結んでいるCEL（大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所）の全面的な協力を得た。池永所長と弘本研究員には、企画だけでなく、文化・芸術団体や関西の領事館との交渉をお願いし、事業の成功へと導いていただいた。

イベントの内容は、まず着物姿で今昔館の町家を見学し、演劇形式の案内によって当時の暮らしぶりを学び（大坂町家劇場）、つぎに吉田家住宅に場所を移して上方舞・茶の湯・書道など上方文化の粋（すい）を体験するというスケジュールで、3日間に17カ国58人の外国人の参加があった。さらに「上方の生活文化」を考える総括シンポジウムでは、生活の場である住まいから和の文化を体験する機会が少ないことが報告され、今後の住まい・まち・都市戦略、文化・観光などについて意見が交わされた。

「大阪くらしの今昔館」で行われた「大坂町家劇場」では、外国人の方が和服姿になり、さまざまな文化を体験した。

参加者のアンケートからは、上方の生活文化を深く知りたいという回答が多く寄せられた。

江戸時代の私塾にならった上方生活文化堂

シンポジウムを取材した産経新聞社の安藤編集企画室長（当時）から、池永所長と私に連続講座開催の申し入れがあった。そこで、江戸時代の私塾をイメージした「上方生活文化堂」（産経新聞社主催、CEL・今昔館の企画）を開講し、大阪の伝統的な「衣・食・住・遊」の文化を、実物資料の鑑賞と上方料理によって学ぶというメニューを提案した。それにふさわしい場として吉田家に座敷の開放をお願いし、床・棚・書院をもつ8畳間と隣の6畳間を「続き間」として使い、床の間に季節の掛軸やひな人形・五月人形を飾った。

講座は、今昔館所蔵『浪花行事十二月』の紹介に始まり、今昔館の学芸員と池永所長による実物資料を交えた大阪の生活文化に関する話、最後に若手天才料理人である栫山（かこいやまかずき）一希氏の手になる上方料理を味わうという趣向である。毎月1回、20人の小さな講座であるが、受講者からは高い評価をいただいた。

日本文化の紹介は、これまで、茶の湯や歌舞伎など日本独自の文化を強調してきた。しかし、グローバル時代における日本紹介は、さらに一歩進んだ仕掛けが必要になる。今回、CELと共同で企画した「和の住まい文化劇場」と「上方生活文化堂」を通して、住まいにおける和の暮らしや「もてなし」の生活文化の魅力を伝えることがきわめて有効であることが実証された。とくに外国人にとっては、自国の暮らしと比較しながら日本の生活文化を体感することで、知識だけの理解では得られない共感が生まれる。日本人にとっても昔の文化を学び、今と比較することで、これからの文化を考えるきっかけになる。まさに「大阪くらしの今昔館」の名前通りの効果である。

「過去を掘り起こし、本質を読み込み、現在・未来へとつなぐ」。これは池永所長が提唱する「ルネッセ」の理念であり、今昔館の目的とも重なっている。CELと今昔館が、それぞれのノウハウを出し合い、連携して事業を展開することで大きな成果を残すことができた。「大阪くらしの今昔館」は、これからもさまざまな団体と連携し、住まいの文化を通して大阪における文化創造の一翼を担いたいと願っている。

「ナレッジキャピタル大学校」にも参加した谷氏。『『大坂城と船場が輝いていた時代』と現代を問う」と題した講義が行われた。

天保初年（1830年前半）の大坂の町並みを再現する、「大阪くらしの今昔館」。

ルネッサ総括

文化的な土壌改良が大阪の地盤沈下を解決する、か？

橋爪節也 Hashizume Setsuya

大阪を中心とした近世・近代美術を研究し、その普及・発展に努めてきた、橋爪節也大阪大学総合学術博物館教授。現在・未来に過去の文化をつなげる難しさに苦心しながらも、地道に活動を続けてきた橋爪氏は、「ルネッサ」の協力者として心強い存在だ。これまでの活動を振り返りながら、未来に向けての視座を提示していただいた。

はしづめ・せつや
1958年、大阪府生まれ。大阪大学総合学術博物館教授、同大学院文学研究科兼任。専門は日本近世・近代美術史。東京藝術大学助手から大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室学芸員を経て現職。主な著書に『モダン心斎橋コレクション』『大大阪イメージ』、共著に『大阪の橋ものがたり』など。

大阪を「ルネッサ」させる艱難辛苦の道のり

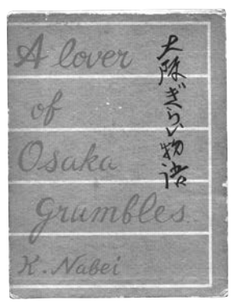
最近の大阪にいささか嫌気がさしている。洋画家・鍋井克之が随筆集『大阪ぎらい物語』（1962年刊）の装釘で、“A lover of Osaka grumbles”と書き込んだように、大阪が大好きな人間が、ぶつぶつ愚痴（grumble）っているのは、大阪人の伝統かも知れないが……。

「地盤沈下」という言葉も、すでに昭和の雰囲気横溢だが、わが町を少しでも浮上させるため、私も大阪市の新しい美術館建設の準備室に18年間、在籍し、その後は大学で美術史を教え、大阪の文化芸術の普及や発展に微力ながら尽力してきた。が、皆で大阪を「ルネッサ」させよやおまへんかと言われても、艱難辛苦は如何ばかり。優曇華の咲きたる春を迎えるとも思われず、老いた敵討ちの浪人の心境の如く、年齢とともに面倒くさくなってきた。少年時代に衝撃的だった小松左京『日本沈没』の名言「何もせんほうがええ」も思い起こされる。

しかし、そうは言ってもCELの提唱する「ルネッサ」の企画には、なぜだか、これまで色々参加させてもらっている。

上町台地 今昔フォーラムでは、2015年3月、「とっておきのコレクション・トーク／憧れの百貨店・商店街と大阪の都市居住文化」で、〝大大阪〟時代を中心に百貨店文化を話した。2017年2月は、川崎巨泉や山内神斧、森田乙三洞ら〝趣味人〟と郷土玩具を「〝しゅみじん〟のまち・大阪レビュー／郷土玩具から広がる「趣味人」ネットワークと近代・大阪の創造力」でとりあげた。

2018年3月、大阪の出版をテーマに「〝知〟の舟を漕いで／上町台地発、〝本〟をめぐる時空の旅へ～ことばと本を愛する人たちの迷宮都市再び～」、同年9月に、味噌汁坊一禅と名のって清談会を開いた暁鐘成をとりあげた「復活！現代版『汁講』＝『知る講』」で司会や資料展示を行った。各回の内容は、CELのホームページで御覧いただきたいが、刊行された「上町台地今昔タイムズ」号外全10号のうち4号に私は関係している。



鍋井克之『大阪ぎらい物語』。

グランフロント大阪の都市魅力研究室での大阪万博・大大阪に関するセミナーや、「ナレッジキャピタル大学校」で講演もし、情報誌『CEL』118号「ルネッサ『耕』――文化を問い直す」にも、『浪花百景』――まずはヴィジュアルの迷路に踏み込んでみる」を寄稿した。

忘却された文化芸術の歴史的厚みを取り戻すために

ずぼらなわりに色々仕事をしたが、フォーラムで依頼されたテーマ――百貨店文化、趣味人、出版、暁鐘成は、政治経済はいうまでもなく一般的な美術史でも、脇道のような特殊なものに見做されがちである。しかし、近世以降、現代に至る大阪文化を考える上では、決して脇道ではなく本筋を行くものであり、その重要性に気づいたのは、2005年に大阪市立近代美術館建設準備室が主催した「〝大大阪〟誕生80年記念《モダニズム心斎橋》展」のときである。

展覧会では心斎橋筋を中心に、道頓堀や難波、千日前にも連なる繁華街の歴史と文化を掘り下げ、多くの作品や資料を再検証することができた。一方、世間では大阪文化の分厚さも知らず、誰かの言いなりになった軽薄なステロタイプの大阪のイメージが吹聴されていた。歴史的な文化芸術の厚みを忘却して、大阪の「地盤沈下」を解決するも何もないものである。

《モダニズム心斎橋》展については、翌2006年の情報誌『CEL』76号に批評「〝街の記憶〟へのタイムトラベル――《モダニズム心斎橋》展とは何だったか」を掲載し、「美術都市・大阪発見」も連載した。個人的には心斎橋筋の本と書肆をテーマとした『新菜箸本撰』（中尾書店発行）なる同人誌を創刊した。

〝街の記憶〟を呼び覚まし文化的土壌を回復させる

しかし、天空を支えるアトラスのように懸命に踏ん張っていたつもりの大阪の地盤は、すでに沈下しきっていたようだ。CELの提唱する「ルネッサ」の理念は「過去を掘り起こし、本質を読み込み、現在・未来へとつなぐ」であり、「再起動」へとステージが進んでいる。そこでの「ルネッサ」の即効薬を私は知らない。それはその道の専門家が提起するだろう。

私から提言できるとすれば、痩せ細った土地に再び豊かな稔りをもたらすには、土壌改良を行うしかない、ということである。

歴史ある大阪の文化的土壌をカラカラに干からびさせ、衰えさせたのが、歴史を学ばない（もとより知る気もない）、目先の効率主義、文化軽視の姿勢であることは、心ある大阪人の誰もが感じている。間違っても土壌そのものを入れ替えるのではない。「ルネッサ」を支えるための土壌を、古い土も最大限に生かして粘り強く耕し、肥やしていくのである。

そこで重要なのが〝街の記憶〟を呼び覚ますことである。かつて蓄積されていた文化的土壌の厚みを回復させるうえで〝街の記憶〟は、個人の人生を超えて遙かな過去にさかのぼる養分である。同時に、未来の〝記憶〟？をも夢見させる引き金になるかもしれない。

第10回上町台地 今昔フォーラム「復活！現代版『汁講』＝『知る講』」では、橋爪氏が中心となり、暁鐘成の人物像や事績などを解説した。

天保亀の模型。左の『天保山名所図会』の図から橋爪氏がブロンズ粘土で考証再現した。

『天保山名所図会』の巻末に暁鐘成が掲載した、天保山の形をした亀の菓子器の広告。「天保山名器蓬莱型畧図」の題に貴人のもっともらしい和歌がしたためられ、右下には「熨斗鎮、文鎮、菓子器等の奇品也、諸君のもとめをこいねがう」（原文は漢文）と熱い宣伝文が書かれる。

ルネッセ総括

広がる「ルネッセ」未来へと文化を紡ぐ企業の活動

情報誌『CEL』やイベントを通じて、「ルネッセ」の考えに賛同していただいた方々に数多く出会った。今回紹介するふたつの企業は、自らの文化活動のなかに、「ルネッセ」の理念とのつながりを見出してくれた。その活動の内容を紹介する。

大阪寿司の復権を目指し歴史を掘り下げたい

株式会社Mizkan［大阪支店営業推進課長］日向智之 Hinata Tomoyuki

株式会社Mizkan
愛知県知多半島の半田市を本拠とする、世界的な醸造酢・調味料メーカー。創業は1804（文化元）年。酒造業を営んでいた初代中野又左衛門が、酒粕を原料とした粕酢を製造し、それが江戸の寿司職人の間で評判となり、やがて酢づくりを本業に。

1804年に尾張国知多郡半田村（現在は愛知県半田市）で創業したミツカンの歴史は、寿司と深い関係にあります。酒造が盛んだった地域で創業家は、酒粕を用いた赤酢の生産に新たなビジネスを見出しました。それがちょうど江戸で生まれた握り寿司（江戸前寿司）の流行と重なり、全国的な普及につながりました。

一方で寿司には、1000年以上続く長い歴史と地域ごとの多様性があります。握り寿司が「SUSHI」として世界中のマーケットに広がっていくことは大歓迎です。でも、寿司にはまだ掘り下げられていない別のポテンシャルがあるのではないか？　大阪支店で仕事をしていた私たちが、大阪寿司の復権と発展を目指して研究を進め、さらにPRイベントまで行うようになったのには、そうした問題意識が背景にありました。

もともと小さなプロジェクトとして始まりましたので、当初は社内でも応援してくれる人も少なく、存続の危機に瀕したこともありました。そんな折に縁あって松岡正剛さんや情報誌『CEL』と関わり、「ルネッセ」を知る機会がありました。過去の歴史を知り、現在や未来につなげていくという考えに共感するとともに多くのことを学び、そして何より勇気づけられました。

都への献上物として、さまざまな寿司が近畿地方に集まってきたこと。北前船など海運によって各地の料理文化とつながっていたこと。そういう場所で育まれた大阪寿司の味には、全国の郷土寿司とつながる、さまざまな要素が詰まっています。そして今、たとえば中国などから訪れる観光客に大阪寿司を食べてもらうと、意外なほどに評判がよいのです。足りないのは大阪寿司がなぜ、どう美味しいのかという特徴や歴史を語るストーリー、そして情報発信です。私たちは多くの人と協力し合いながら、これからも大阪寿司の歴史を掘り起こし、目に見える形、味わえる形で、より魅力的な大阪寿司を発信していけたらと思っているところです。

右／酢づくりの歴史や食文化を学べる、愛知県半田市にあるミツカンミュージアム。
左／昨年10月に開かれた、大阪寿司のPRイベント。

「散走」を通じて自転車の醍醐味を発信

株式会社シマノ［企画部 文化推進担当 専門部長］神保正彦 Jinbo Masahiko

株式会社シマノ
1921（大正10）年、島野庄三郎が、明治以降に自転車産業が発展していた大阪・堺の地に設立。わずか1台の工作機械での部品製造からスタートした同社は、絶え間ない自己研鑽により金属加工技術を向上させ、世界有数の自転車部品・釣具メーカーへと成長した。

鉄の街・堺市で1921年に創業したシマノは、自転車の変速機やブレーキといった主要コンポーネント、釣具などをつくってきた「ものづくり企業」。派手な宣伝より、「いいものをつくれば使ってもらえる」の信念で金属を叩いて形をつくり、開発と製造に励んできました。「文化の創造」などといっても、社員の多くはピンとこなかったのではないでしょうか。

しかし1980年代から世界中で流行したマウンテンバイクの部品をつくる過程で、新しい自転車文化が生まれる場所に立ち会い、ものづくりを通してそこに参加する意味に気づかされました。その頃から少しずつ、自転車を楽しむ文化を日本につくるとしたら？　ということを考えるようになったのです。

たとえば2006年、より多くの人たちに自転車をライフスタイルに取り込んでもらうことを目的とし、東京・南青山に「ライフ・クリエーション・スペースOVE（オーブ）」をつくりました。そこで音楽、食、あるいは日本の伝統文化など、テーマに沿ったイベントを開催し、「散走」を取り入れました。「散走」というのは、散歩のように自転車で走ること。身近な日常と非日常のあいだに新しい発見、出会い、楽しみやサプライズがある。そんなニュアンスをもつ造語です。

情報誌『CEL』119号でもヤン・ゲール氏による人間中心のまちづくりが取り上げられましたが、たとえばコペンハーゲンでは自転車が大きな役割を果たしています。今、ヨーロッパを中心に自転車に追い風が吹いている。でも、それだけでは不十分です。「ルネッセ」のように、編集・翻訳を通じて新しいモードを生み出していく、という考え方が大切だと感じます。

自転車は、「所変われば品変わる」。同じ移動手段の自転車でも、日本とオランダではまったく違います。日本で広く使われている軽快車を否定的に語る人もいますが、ぺたっと足がついてすぐ井戸端会議ができる、商店街での優れた移動ツールです。四季の移ろいや時間の経過を細やかに感じる日本のライフスタイルに合った、独自の自転車文化が生まれる可能性はあると信じ、研究と提案を続けていきます。

右／自転車・釣り文化を紹介する、グランフロント大阪内のシマノスクエア。
左／「散走」はゆっくり自転車を走らせながら、街並みや自然を楽しむ。

ルネッセ総括

「ルネッセ」×ナレッジキャピタルが「これまでと、これから」つなぐ

「ワイガヤ塾」などさまざまなイベントで協力関係を築いてきた「ルネッセ」とナレッジキャピタル。5周年の集大成として、2018年4月に開催された「ナレッジキャピタル大学校」には、「ルネッセ」に関わる多くの人々が参加した（本誌119号）。大きな反響を得たこのトライアルイベントに関わった3人の方々に、これまでの活動や今後の展望をうかがった。

大阪を地域全体で学べるニューエデュケーションシティーに

［ナレッジキャピタル総合プロデューサー］野村卓也 Nomura Takuya

のむら・たくや
1953年、大阪府生まれ。一般社団法人ナレッジキャピタル総合プロデューサー。株式会社スーパーステーション代表。内閣府本府政策参与（科学技術・イノベーション担当）、関西大学客員教授、大阪芸術大学客員教授。創造産業振興のためのプロジェクトを数多く企画。ナレッジキャピタルでは開業前からコンセプト立案などトータル企画を手がける。

ナレッジキャピタルを開業して、今年の4月で6年になります。形になるまでは、構想を話しても、「大阪で知の拠点？　大阪はお笑いとタコ焼きやろ」という反応が大半でしたが、都心にオフィスや商業施設とともに知的拠点があるというそれまでなかった形態が、オープン当初から特に海外で注目されました。これまでに公式で80カ国、400機関程度の視察団を受け入れています。大阪と世界をつなぐというのは当初からの狙いではあったのですが、これほど世界中から注目されるとは予想外でした。

これまでさまざまな形で「学び」の場を設けてきました。カフェという気楽な場で専門家から話を聞く「超学校」は、受講者と講演者の距離が近い対話のようなプログラムとして好評ですし、革新的な活動を表彰し広く社会に発信する「ナレッジイノベーションアワード」ではナレッジキャピタル参画者の部門のほかに中高生部門を設定し、中高生と企業や大学が双方に直接交流できる場にもなっています。

「ルネッセ」や池永所長との交流のなかで知ったこともたくさんあります。江戸期の人的ネットワークの中心にいた木村兼葭堂（けんかどう）もそうでした。兼葭堂の、人的関係をつくったうえでその信頼関係から新しいものを創造していくやり方は、自分の目指すものと重なると感じました。そうした知見が異業種交流塾「ワイガヤ塾」へと発展し、昨年の「ナレッジキャピタル大学校」を企画するうえで、大きなヒントになりました。

「ナレッジキャピタル大学校」は2日間に限って開催されたトライアルイベントでしたが、アートパフォーマンスや体験型展示などを交えた大規模なものです。中心となる100コマ超の講義では、大学教授、企業家、美術館館長、子育て研究家、料理家、発明家といった多彩な専門家を講師に迎え、ジャンルやスタイルを超えた幅広い知の集合を実現することができました。参加者の方から「こんな学びの場が欲しかった」という反応をもらえたのは嬉しかったですね。開業から5年間の取り組みのなかで、学びの重要性をますます実感しています。実際、大学卒業の22歳までに勉強したことだけで、65歳までいけないですよね。どこかで学び直しをしていかないと。そういう場ともなるよう、今後、「ナレッジキャピタル大学校」を定常化していきたいと考えています。実践的な内容で、そこを出口として次につながるような内容を検討中です。そこから大阪が地域全体で学べる、ニューエデュケーションシティーになればと考えています。

子どもが感激するような大人の本気を見せたい

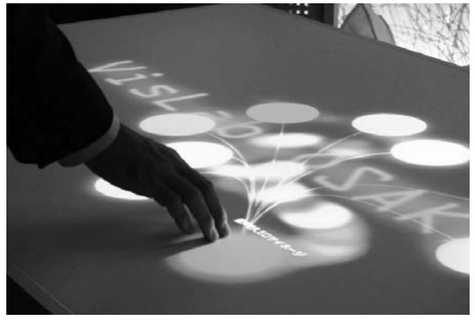
［株式会社ズームス代表］保田充彦 Yasuda Atsuhiko

僕がやっている仕事は、一言でいうと「科学技術と社会をつなぐ」ことです。高度な科学技術をわかりやすく伝えることで、一般の人が教育とか政治、経済について話をするように、「科学技術でこんなことがあったよ」と普通に話題にできるような世の中になればと思っています。それには、まず興味をもってもらえることが大事。実際僕自身、小学校入学時に大阪万博を見に行って、記憶としてはおぼろげなのに、感動したことは今も生きている。その体験に引っ張られて現在があると思っています。

ナレッジキャピタルとは、オープン前のトライアルから関わっていて、「ワイガヤ塾」にも参加していますが、「ルネッセ」と聞いた当初は、「文化」と言われてもわからなくて。というのもこれまで何をするにも「体感する」ことを大事にしていて、たとえば英語を勉強するなら文法を覚えるより先に英語の本を読むとか、実際にやってまず感覚を身につけてきました。だから「文化」なんて僕とは対極だと思ったんです（笑）。でも講演で、これまで単なる場所としか考えていなかった大阪が、「その裏に文化があって今がある」というお話に、クリエイティビティというのは結局そこにつながっていくのだなと。技術とか理論ではない、もっと漠然とした――僕ならば体感、「ルネッセ」ならば文化とか歴史、翻訳というキーワードで語っているけれど、見ている場所は同じなのだと感じました。

「ナレッジキャピタル大学校」では、講義のほかに開発したバーチャルドローンや立体絵本などを実際に見てもらいました。こうしたイベントな

やすだ・あつひこ
1963年、兵庫県生まれ。株式会社ズームス代表。京都大学大学院航空工学専攻修士課程修了。重工メーカーのエンジニアとしてジェットエンジンなどの開発に携わった後、2006年にズームスを設立。科学技術をわかりやすく伝えるための映像化・可視化事業を続ける。



右／「ナレッジキャピタル大学校」での、VR技術を活用したバーチャルドローン体験ブース。
左／ナレッジキャピタルオープン前のトライアルイベントでは、保田氏の開発したタッチウォールがインフォメーションパネルとして活用された。

右／「ナレッジキャピタル大学校」の会場を彩ったイベントのシンボル「宇宙鳳凰［フェッコ］Phoecco」。
左／ナレッジキャピタルのサロンには、企業人、研究者、クリエイターなど、分野を超えたさまざまな人が集まる。

どで子どもたちに体験してもらうことで、ある種の化学反応が起きるととても嬉しい。僕が万博を見てその技術をすごいと感激したのと同じように、子どもの頃の影響は大きいですから、大人が本気を出すとこんなことができるというのを見せてやればいいと思うんですね。そうすれば、すごいと感じてくれた子どもたちが、将来もっとすごいものをつくってくれると思っています。

「学び」の場づくりを通して中高生が本物にふれる機会を

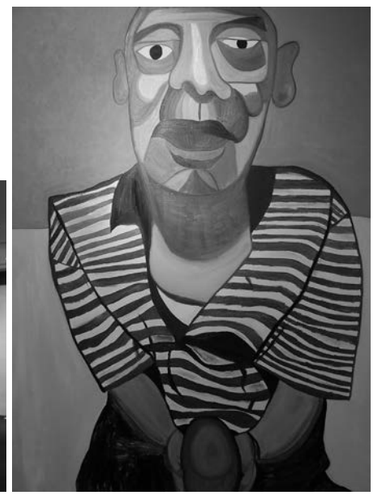
［株式会社スーパーフェスティバル クリエイティブディレクター］山本粧子 Yamamoto Shoko

「ナレッジキャピタル大学校」で、全体のアートディレクションを担当させていただきました。2日間の大学校を通して、今まで携わってきた仕事のなかで一番「人間の心が動いている」のを目の当たりにした気がします。教室に物理的な壁をつくらないことで、受講者と講師のどちらもが「参加者」となり、人間の心の中の壁も無くなるのだなと感じました。何より、「学びながら盛り上がる」という初めての経験をし、これからこういったことが大切になると確信しました。

中高生時代のバレーボール一色の生活から一転して、大学で美学を専攻した当時の私は、視野も偏っていましたし、美術の知識も全くありませんでした。そんなときに、大学の先生から「あなたはとにかく本物を見てきなさい」と言われ、お金を貯めては海外に行って本物の絵を見るという学生生活を送りました。さらに卒業後は旅人ではなく生活してみようと、フランスとドイツの国境付近にあるストラスブールで2年間暮らしました。そこでのさまざまな経験を経て、自分があまりにも日本の社会を知らないことを実感しました。それまで日本よりも海外に目を向けていましたが、海外生活を通して、「もっと日本を知りたい」という思いが生まれ、帰国してこの仕事に就きました。今はむしろ日本の未来をつくっていきたいという気持ちがあります。

池永所長から「ルネッセ」という言葉を聞いたとき、その語源の「ルネッサンス」に美術の文脈で使う言葉というイメージがあったので、それが社会の文脈で発信されることに衝撃を受けました。池永所長をはじめ、ナレッジキャピタルでそうしたワクワクするような方々と出会えたことを財産にしていきたいですね。もし、中高生時代にそうした出会いがあれば、人生を変える瞬間になると思います。自分自身海外で本物の絵にふれたことで得た感覚が大きいので、これからは中高生が最初から本物と出合えるような企画、ハッピーでワクワクするようなプログラムを考えていきたいと思っています。

やまもと・しょうこ
1989年、兵庫県生まれ。株式会社スーパーフェスティバル クリエイティブディレクター。大阪教育大学教育学部教養学科芸術専攻芸術学コース卒業。「人間とはなんだ」をテーマに創作活動を続ける。2019年8月には、兵庫県立美術館王子分館原田の森ギャラリーにて「山本粧子展 人間とはなんだⅢ」を開催予定。



右／山本氏の作品『輝老人のマンゴー』。
左／「ナレッジキャピタル大学校」で展示された山本氏企画の「のぞきからくり」。本誌でもおなじみの木村蕏葭堂や懐徳堂の紹介を、3Dなどのしかけで解説する。

ルネッセ総括

つながる「ルネッセ」未来に向けて文化を伝える活動

日本の文化を学び、育み、未来へつなげていくため、情報誌『CEL』での取材やイベントを通じて、その理論や方法論を真剣に考える方々に出会った。その交流のなかで「ルネッセ」の考え方に共鳴し、自身の活動に役立ててくれた人も多くいる。そうした方々の声を紹介する。

無理をしないで文化を継承する道を探す

［気仙沼市地域福祉計画推進委員］吉田千春 Yoshida Chiharu

CELの方たちと知り合ったのは、情報誌『CEL』116号で谷直樹さんと三浦史朗さんの対談が気仙沼で行われたとき。案内役として現地をめぐりながら、気仙沼の現状や漁業をめぐる産業構造の仕組み、生活文化などについてお話ししました。これをきっかけに交流が始まり、気仙沼の復興とまちづくりをテーマに行われたルネッセ・セミナーで講師を務めました。

私が生まれ育った鹿折地域は、東日本大震災で街全体が火事にさらされ、気仙沼の中でも最も被害が大きかった場所です。主要産業の漁業を中心に復興は進められてきましたが、人口減少と高齢化が進んでいるなかで、地域をどう維持し、育てていくかが現在の課題になっています。そこで私が行ってきた支援活動は、アクティブシニアの女性を中心にした「手仕事づくり」です。手仕事を覚えてもらい、それを覚えた人が誰かに教えていく仕組みをつくりながらネットワークを育み、地域のコミュニティ機能を回復しようと模索しています。

でも、いったん土地や人のつながりが崩れてしまった環境で、地域特有の食文化や行事などを存続することは難しくなっています。伝統を残さずして、地域が復興したと言えるのかという疑問はもちろんあります。しかし、伝統だからといって、すべてをそのままの形で残そうとするのは正しいやり方だと思いません。そのままの形ではなくとも、現在の生活のなかで続けられる方法を考えながら受け継いでいくことが、適切なプロセスではないかと思います。

復興やまちづくりというのは、どうしても皆が納得する正しい道に進

よしだ・ちはる
1971年、気仙沼市生まれ。2003年に「生きること」をテーマに任意団体を立ち上げる。2011年、東日本大震災を経験し、支援活動に従事。手仕事で女性を支援するプロジェクトを開始する。同年から5年間、宮城県震災復興情報発信局記者。2018年から現職。

2017年11月に行われたルネッセ・セミナー。気仙沼の現状やまちづくりの方向性を語った吉田氏に、参加者から多くの質問が寄せられた。

もうと肩に力が入りがちです。でも、無理をせず自分たちに合った方法を見つければいいんだと考えられるようになったのは、池永所長からさまざまなまちづくりのあり方や考え方を聞いたおかげかもしれません。地域の歴史や文化を知り、その本質を掘り起こして、現代、未来への新しい価値をつくろうという「ルネッセ」の考え方は、これからのまちづくり、地域づくりを考えるうえで、大事なことだと思います。

外国人こそ日本のことがわかります

［通訳者］鐘燕 Sho En

枕の下に置いて常に癒やされている本が2冊あります。1冊はインドのタゴールの『迷い鳥たち』で、もう1冊は日本の清少納言の『枕草子』です。インドの菩提樹や日本の平安時代の宮廷内の四季の美しさは、作家たちの感性を通して、国境を越え、時間を越えて、われわれに訴えかけます。

しかし、急激な経済成長を遂げながら、インド社会が身分制度などを抱えるのを問題視されているように、豊かな一方、さまざまな矛盾を孕む日本社会は、さながら失楽園のようだとも言われています。「バブル崩壊」、「失われた20年」、「少子高齢化」、「自殺率上位」などの言葉は、日本人だけでなく、日本を語る外国人の口から必ず出てきます。本当に日本はここまで凄まじい状況になっているのでしょうか。

3年前に初めて日本を訪問したとき、目に入ったのは澄み渡った青空、青々しい田んぼ、隅々まで綺麗な街ばかりで、まるで宮崎駿のアニメの中に入ったかのようで感動していました（宮崎駿のアニメを見ると、常にその美しさに感動させられて涙が出ます）。

ショウ・エン
1989年、中国湖南省生まれ。通訳者。長沙大学日本語学部卒業。旭硝子に勤務したのち、日本語通訳者として活動。情報誌『CEL』120号での深圳取材に同行した。

滞在期間が長くなるにつれ、この感動は減るどころか、逆に増すばかりです。草の中で躍動しているトカゲ、捨てる前に必ず綺麗に洗われる牛乳瓶、親切な店員さんたち……とても平凡な風景だけれど、自然と頭が下がります。確かに、経済や社会は活力を失い、低迷状態になっています。しかし、これは決して失楽園の風景ではないと思います。

2018年夏、情報誌『CEL』120号での中国・深圳（しんせん）の取材に同行させていただきました。池永所長が遠いヨーロッパのオランダ・デンマーク、アジアの中国・シンガポールに奔走して、日本を再起動する道を探す姿に再び感動しました。

最近、手塚治虫の遺した傑作『どろろ』が再びアニメ化されました。鬼神により生まれつき体の48か所を奪われた少年・百鬼丸が、体を取り返すため妖怪を倒す苦難の旅に出る物語です。目も、耳も、皮膚までも失い、ただ一つ残されたのはその純白の魂で、からくりの体を支えながら乱世の中で戦っています。私はこの少年から日本の姿が見えました。それは、平安時代の清少納言の『枕草子』の感性の魂、室町時代の戦乱の中の侍の魂、現代の綺麗な日本をつくった人々の幸せを求める魂です。

右／世界最速で成長を続けるといわれる実験都市・深圳。
左／高性能ロボットアームを開発するメイカーへの取材で、通訳を担当した鐘燕氏（写真中央）。

タゴールは訪日したとき、「外国人こそ日本のことがわかります」と話しました。それは、私と同じく日本の魂を見たのだと思います。経済の暗雲を透してその魂を見つければ、必ず幸せにたどり着けると思います。

想像力を豊かにする大阪で若者のための「場」をつくる

［株式会社結コンサルティング代表］トロイアノス・アンジェラ Troianos Angela

トロイアノス・アンジェラ
1976年、アメリカ生まれ。2004年来日。関西領事団事務局長として同団と行政機関や民間団体との橋渡しを担当。2018年11月、公的・文化関係機関へのコミュニティコンサルティング、トレーニング・プロジェクトマネジメントを提供する株式会社結コンサルティングを設立。

私はアメリカ・シカゴに育ち、イリノイ大学を卒業後、いろいろなご縁があって2004年にJETプログラム（語学指導などを行う外国青年招致事業）で日本に来ました。日本語もまったく話せないまま来日し、愛媛県伊方町、大阪府寝屋川市で働いた後、2015年に同志社大学大学院ビジネス研究科を卒業しました。

大学で学んでいたときに、ナレッジマネジメントや持続可能な社会のためにビジネスで何ができるかといった課題を専攻していたのですが、そのなかで、大阪で生き続けている伝統的な商業センスに興味を持ちました。大阪の人はオープンで人との距離感が近いと感じます。また、世界から人や物が集まってきた歴史をもち、私のような言葉の壁がある外国人もフレンドリーに受け入れる柔軟性がある。自分たちの文化を守りながら国際的なふるまいもできるそのセンスは、文化遺産といえるのではないかと思います。

現在、関西領事団の事務局長を務めており、高校生と総領事によるシンポジウムを開いたことがあります。そこで講義をしてくださった池永所長とご縁がつながり、「ルネッセ」のイベントの参加者を募るお手伝いをしました。当日は私も参加したのですが、素晴らしい内容で、大阪の歴史や遺産について知ることができました。こうした大阪の精神や風土をもっと若い世代が学んでいくことが大事だと感じました。

こうした経験から、若者や外国人の視野を入れた「場」をつくれるようなソーシャルビジネスを始めたいと考え、会社を立ち上げました。

今の若者は可能性にあふれています。ただ、これまで語学指導をした経験からも、彼らは外に目を向けない傾向があることや、与えられた問題の解決はできても自分で問題を提起する力が弱いと感じます。何よりいろいろなことを知り、考える機会や場がないのです。これは学校の問題というより、社会と横のつながりがないのが問題ではないかと考えています。大阪という土地には想像力を豊かにするポテンシャルがあります。そこからもっと若者が学べるようにしていきたいです。

新しく起こした社名はいろいろな物を結びつなげたいという願いから「結」としました。NGOではなく株式会社としたのは、社会への貢献として活動することを重んじたからです。今のところスタッフは私ひとり、規模は小さいけれども、これまで私が大阪から学んだことを生かし、できる範囲で次世代の未来への支援ができればと思っています。

右／シンポジウムと連動して行われた「大阪・和の暮らしを体験する会」には、多くの外国人の方が参加した。
左／「『上方の生活文化』を考えるシンポジウム」でコメントを寄せるアンジェラ氏。

ルネッセ総括

五感で学ぶ、上品で上質な大阪の文化
――「上方生活文化堂」が取り戻していること

池永寛明
Ikenaga Hiroaki

「うるさい」「きたない」「品がない」……要約すれば派手で下品で幼稚。他地域から見た大阪のイメージというと、このあたりが「定番」になって久しい。そして当の大阪の人もそれを甘んじて受け入れているように見える。

しかし本当は、こうしたイメージの定着は1960年以降のことで、それまでの大阪には上品で上質な生活文化があったのだ――と言っても「ほんま？」と訝しげな反応が返ってくることが多い。

それくらい今の大阪の人は、「大阪の良さ」に気づいていない。自分たちが踏みしめている地に根付く、厚みある歴史や文化を知らないから、「それはちがうで。ほんまの大阪はこれでっせ」と、反論できるだけの言葉を持てないのである。

文化講座「上方生活文化堂」を企画した背景には、そうした現実への危機感があった。

大阪市内天王寺区界隈に「天王寺七坂」と称される、四天王寺から谷町九丁目までの谷町筋西側に分布する7つの坂道がある。ほとんどの坂が細い石畳と石段で構成されているうえ、周辺に寺院が密集する地域ということもあって「ここは本当に大阪？」と驚くほど閑静な風情が漂う。

私は外国の方をご案内する時は、必ずここへお連れすることにしている。それは、失われてしまった上方生活文化の香りがここには残っているからである。

そう、まだそういった場は大阪のそこかしこにわずかながら残っている。今ならまだ、体感できる。そんな思いで2017年10月より始めた「上方生活文化堂」は、吉田家住宅という今も人が住まう100年住宅を会場とした。暮らしの気配が濃厚に存在する場はそこにいるだけでも、五感に強く訴えかけるものがあったと思う。

講座の詳細についてはすでに本誌過去号や、今号では谷直樹「大阪くらしの今昔館」館長が詳細に書いてくださっているので、ここではそこから得られた成果について見ていきたい。

「上方生活文化堂」は、フェーズ1、全12回の講座を終えている。受講者定員20名という少人数ながら、毎回濃密な内容が繰り広げられた講座では、回を重ねるごとに講師と受講者の関係性も「話す人」「聴く人」の一方通行ではなくなり、時に受講者側からのアプローチもあった。たとえば、蝦夷地から大坂まで海路による物流を担った北前船が、当時の大坂の産業・経済・文化を育てたことはご承知だろう。受講者のなかにそうした廻船問屋の末裔がおられ、家に残る貴重な資料類を持ち込んで解説してくださったことがあった。江戸の空気感が残る資料、それについて生きた情報がその場で共有できたことは得難い経験となった。

私は北前船が運んだのは、何より「情報」だと考えている。北前船によって大坂に集められた情報をもって大坂の人間は学びあい、交流しあい、掛けあわせ、混じりあわせ、変換させ、価値あるものやビジネス、産業を産み出していった。

そして大坂は全国の富の7割を集める日本最大の商業都市となった。船場を核とした大坂三郷という狭い空間に600もの町ができ、日本のあらゆるビジネスが凝集し、40万人の商人たちが住み、学び、働いた。そこに全国の商人たちと観光に訪れる人たちの交流人口が加わった。大坂は極めて高密度な場であった。

その町には木村蒹葭堂、石田梅岩、富永仲基、山片蟠桃、麻田剛立、藤沢東畡、橋本宗吉、緒方洪庵、暁鐘成など、すごい〝町人〟学者たちがいた。商人たちはそのすごい人たちを訪ね、対話した。大坂にはそのような寺子屋、私塾、講があり、まるで町全体が大学のようでもあった。

かつての上方らしい風情が残る天王寺七坂。

大坂にとって最大の資産は人材である。働きながら学んだ。学んだことを仕事に生かした。わからないこと、確かめたい課題をもって、そのことに詳しい人を訪ねて対話した。逆に自分が教えることもあった。このように教え学び、学び教える。みんなでワイワイガヤガヤした。勉強のための勉強ではない。学びが社会に直結した。学ぶことが楽しいからさらに学んだ。大坂は日本一勉強した町だったのだ。

「上方生活文化堂」という場もまた同じだ、と感じた。互いに学びあっているという実感は、私だけでなく受講者皆が共有していたようである。フェーズ1の講座の最終日に、これで一区切りとアナウンスした瞬間、「えー！」と惜しむ声がいっせいに会場中からあがったのが、それを物語っていよう。

先ほど、「混じりあう」と書いた。このキーワードは、「上方生活文化堂」を通して得たもので、大阪の本質を表していると思う。本誌巻頭対談でもふれたように、大阪は、多様なもの、新旧という時間軸を「混」じりあわせて新たなものを生み出しつづけている都市である。ことに本講座で椏山一希氏によって毎回供される大坂料理にそれを見いだす。大坂料理の本質は「出会いもの」であり、それら旬の食材を「混」ぜてそれぞれの良さを引き立てあう、そこに大阪の本領がある。

「上方生活文化堂」は、2018年11月以降、フェーズ2として3カ月に1回の開催ペースで継続している。これからも、学びあい、混ざりあいながら、新しい化学反応が生まれるだろうことが楽しみである。

 加藤しのぶ（32〜34頁、37〜39頁）、脇坂敦史（30〜31頁）＝構成

スポーツクラブが都市を駆動させる
――ドイツ・エアランゲンからのリポート

競技スポーツに関心が向きがちな日本とは異なり、ドイツでは、スポーツがあらゆる人にとって身近で、都市内のコミュニティの「場」作りに欠かせないものとして捉えられている。市民が自発的に運営する地域総合型のスポーツクラブが町中にあり、地域を活性化する強力なエンジンになっているという。なぜ、ドイツで、このようなスポーツクラブが発展できたのだろうか。日本で、市民主体のスポーツクラブをもっと興隆させるにはどうしたらよいのか。在独ジャーナリスト・高松平藏氏の報告から考察する。

高松平藏
Takamatsu Heizo

たかまつ・へいぞう
ドイツ在住ジャーナリスト。1969年奈良県生まれ。京都の地域経済紙を経て1990年代後半から日独を行き来するようになり、2002年、エアランゲン市に居を定めた。同市でセミナープログラムなどを開催するほか、日本へ一時帰国し大学や自治体で講演活動を行う。著書に『ドイツの地方都市はなぜクリエイティブなのか――質を高めるメカニズム』『ドイツの地方都市はなぜ元気なのか――小さな街の輝くクオリティ』（ともに学芸出版社）、『エコライフ――ドイツと日本どう違う』（妻・アンドレアとの共著、化学同人）がある。

「ドイツにはスポーツクラブがたくさんある」といっても、ピンとくる人は少ないと思う。日本でも少しずつ増えてはいるが、実情はドイツとかなり異なる。彼の国のスポーツクラブは地域社会の一部であり、また地域社会を発展させていくエンジンのひとつでもある。

はじめに――NPOで都市はもっている

ドイツも日本も、いわゆる「先進国」だが、社会の肌触りのようなものはかなり異なる。当然といえば当然なのだが、風土、歴史といったものから、社会に対する個人のあり方といったものにいたるまで様々な要素の編み上がり方が違うからだ。

私はバイエルン州北部のエアランゲン市（人口約11万人）に住みながら取材、観察、調査を継続的に行っている。すると行政、政治、市民活動など、様々な要素がどのように関連しあって、町が成り立っているのかがある程度見えてくる。

その中でひとつ重要なのが、NPOに相当する組織だ。数だけでいえばドイツ全体に約60万ある。日本で現在5万2000程度［*1］だから「桁違い」とはこのことだ。日本に比べて歴史も古く、発展経緯も違うのでしかたがないが。この数の多さは地方都市にも反映されている。エアランゲン市の人口は、大阪市でいえば阿倍野区など、「区」レベルだ。その人口規模の町に、NPOに相当する組織が約740ある。

これだけあると、必然的に町の中で、なくてはならない存在になる。専門的な知識・技術・ノウハウが蓄積されてくるし、社会に必要なサービスを提供するところも少なくない。それは一般市民向けのような性質のものもあるし、自然保護のように専門性が高く社会運動に近いことを行うところもある。自前のギャラリーを持ち、地域のアートシーンを作っているケースもある。そうかと思えば、町の歴史を扱う学術と郷土文化の保護を推進するような、地味だが公的意義の大きいものまでたくさんある。

そして、行政に参加するケースも多い。イベント系の取り組みなどはわかりやすい例だが、行政が何かしらの課題を推進していく場合、その予算案を作る過程でNPOも会議に加わっていることがある。そうかと思えば、NPO側の発案で政治や企業、行政との協力体制を作っていくケースもある。

こういうことが日常茶飯事なので、今さら日本のように「協働」といったことを声高に言う必要がない。それゆえに、NPOなしでは、都市が成り立たないのではないかとさえ思えてくるのである。そして、NPOは自由意思による活躍、いわゆるボランティアのための場にもなっている。

本稿のテーマであるスポーツクラブも、こういったNPOに相当する組織で、ドイツ全国に約9万ある。エアランゲン市を見ると100程度。そして、そのメンバーの数を合わせると約3万8600人におよぶ。ここでもう一度、想像してほしい。大阪市の区の規模の自治体に、スポーツクラブも含むたくさんのNPOがあるのだ。スポーツクラブも含むNPOが「社会の一部」であるということが想像できるだろう。

スポーツにどんな価値体系があるのか？

スポーツクラブは「社会の一部」である以上に、「社会を作るエンジン」のひとつでもある。なぜならスポーツクラブには、数多くの社会的機能があるからだ。ここでは、その社会的機能の根拠になる、ドイツにおけるスポーツの価値体系について見てみよう。

日本のスポーツは「体育会系」という一種の価値体系が幅を利かせている。人生を賭して競技に取り組むようなところがあり、「根性論」がその伝統的燃料だ。そのせいか、「勝負に勝つ」「記録を伸ばす」といった方向性が強い。また、「先輩後輩システム」という秩序があり、さらに指導者の権威が強すぎることがある。そのため昨今はトップアスリートや学校の部活での、指導者による暴力が問題化している。もっとも、これは以前、普通の指導方法だった「体罰」が「暴力」として捉えられるようになった、日本社会の変化も見なければいけない。

一方、ドイツのスポーツの価値体系は「スポーツクラブ」が作っているといえる。スポーツクラブそのものは古く、19世紀からの歴史がある。しかし、その誕生は、今の日本でのスポーツクラブの議論とはかなり文脈が異なる。

19世紀初頭、ドイツはナポレオンとの戦争に負けた歴史がある。これに呼応するかたちでナショナリズムが生まれてくる。そんな中、教育者フリードリッヒ・ヤーンが青年たちの愛国心を高め、体力を強化することを目的に「トゥルネン」を作りだす。「トゥルネン」とは、あえて日本語にすれば「体操」という訳が当てられる。「体操」がなぜ愛国心を強めるものになったかといえば、民族性と重ねられたからだ。これは、やや乱暴だが、日本の武道を考えると想像しやすいかもしれない。柔道や剣道にはすり足などの日本独自とされる身体性、さらには精神性がついてまわる。こういう

筆者が暮らすエアランゲン市は、ドイツ南部のバイエルン州に位置する。人口は約11万ながら、医療技術やハイテク分野に強く、大学都市として発展してきた。

上／柔道も町の道場や「部活」ではなくスポーツクラブで行われる。「柔道クイズ」でポイントを競うフェスティバルなどもある。
下／スポーツクラブのサッカーキャンプ。親子混成チームで対決（上下とも筆者撮影）。

部分が妙にクローズアップされると、愛国精神やナショナリズムの拠り所にされる。トゥルネンも「民族の身体文化」というわけだ。

一方、トゥルネンを経て確立された人間関係を見ると、「ともに体操をする仲間」という平等な関係を強調した。ドイツ語の二人称には「ドゥ（お前、君）」という親称と、「ジー（あなた）」という社交称がある。若者同士は最初から親称を使うが、一般には「あなた」から「お前」に切り替わるのに思いのほか時間がかかることがある。今日でもそうだから、２００年前だと職業・身分による壁は高いものだっただろう。そうした中であっても「体操をともにする仲間」は「お前」という親称で呼び合った。これは現代でもそうだ。しかし当時は「平等性」の強調・確認以上に「同志」という強い結束の感情を呼び起こす装置にもなっていたのかもしれない。19世紀には「体操家の歌（トゥルナーリート）」がたくさん作られるが、歌詞を見ると連帯を意味する「兄弟愛」などの単語も散見される。

ともあれ、ここではスポーツクラブの初期の段階で、人間関係の秩序のあり方が確立された。結束とともに、平等性を強調する要素が組み込まれたことを確認しておきたい。この時点で日本の「体育会系」と方向性が全く逆だということがわかる。

「万人のためのスポーツ」の実際

戦後の旧西ドイツでは、１９６０年代から「万人のためのスポーツ」というモットーがいわれ、ドイツオリンピック協会らスポーツ団体からの動きで、自治体・州・連邦も動き、スポーツ設備が増えた。加えて様々なキャンペーンプログラムも行われた。とりわけ、直訳すると「幅広いスポーツ（ブライテンシュポルト）」と言われる概念が広がったことが重要だ。ドイツでは概念定義を厳密に行う傾向が強いが、この「幅広いスポーツ」は口語的で、わりと広い範囲で使われている。筆者の印象では、「幅広いスポーツとしての……」といえば、だいたいトップクラスのアスリート以外のスポーツ全体を意味する。私見を述べるならば、こうした言葉があるために、よりスポーツクラブの社会的機能を強化できるのではないかとも思えるのだ。

例えば筆者もエアランゲン市内の「体操クラブ」のメンバーになっている。これは19世紀半ばの設立時に体操クラブとして始まったために付けられた名称であるが、実際には、複数の競技を扱っている。日本で「総合型スポーツクラブ」と紹介されているタイプのものだ。

このクラブの柔道部署で筆者は柔道を行っているが、「幅広いスポーツとしての柔道」である。高校生ぐらいから年金生活者まで、まさに老若男女が一緒にトレーニングしている。その内容は技術トレーニングも行うが、遊びの要素も多い。乱取りでも、技の掛け合いを楽しんでいる。日本に比べてドイツの大学生は勉強に費やす時間が長いが、息抜きのために来ている。一方で乱取りを楽しみたい中高年同士が汗をかきながら、子供のように組み合っていることもある。試合に出る人もいるが、それぞれのレベルで頑張っている。

それから、年間を通じてバーベキューなどの飲食をともにする機会があり、クラブの施設にはサウナやレストランもある。畳から下りると、おしゃべりに花が咲くわけだ。

もうひとつ加えるならば、ドイツの学校には日本のような部活がない。もちろん、部分的にスポーツのプログラムや授業はあるが、日本のように学校で早朝や授業終了後に練習という光景はない。では、子供たちはどこでスポーツをしているのかといえば、スポーツクラブだ。そのため、先述の柔道のトレーニングでも10代と60代が同じ畳の上で汗をかくわけだ。もちろん、これだけ歳が離れていても、二人称は「お前」という親称である。

数多い、スポーツクラブの機能

こういった普段の様子を見た時、スポーツクラブに多くの機能があることに気がつく。

まずは、老若男女で職業、肩書きなどの立場を抜きにした社交が実現していることだ。今日の議論でいえば「社会的共通資本」や「サードプレイス」といったものをかぶせて見ることもできるだろう。

それから「都市」の定義は意外と難しいものだが、ドイツを見ると歴史的発展経緯から、都市のイメージや概念が比較的はっきりしている。都市は建築物が密集している空間だが、同時に人間も密集している。しかし、いわゆる地縁・血縁という、プリミティブな関係ではない。「赤の他人」の集まりということが前提だ。それゆえ、人々が知り合うきっかけを恣意的に作ることが重要で、それは文化政策の役割のひとつだ。これで「赤の他人」の集まりからコミュニティ要素を持った集団になっていくわけだが、スポーツクラブもその役割を担っているかたちだ。

今日のドイツの課題に、移民や外国のルーツを持った人々と、いかに人間の尊厳を保ちながら、社会秩序を再構成すべきかというものがある。その課題を推進するのにスポーツクラブが一役買っている。というのも、スポーツそのものに相互敬意、公正などの価値が含まれているのに加え、クラブで定期的に一緒にトレーニングをすると、お互いの精神的距離が縮まるのも早いからだろう。また、インクルージョン、すなわち誰も排除されない社会とも関連付けられている。

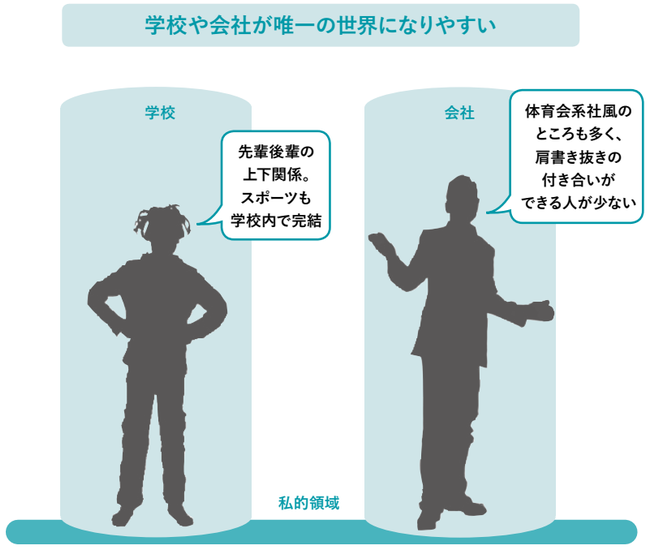
さらにクラブは自由意思による貢献ができる場だ。トレーナーのライセンスを持つ人は、わずかな報酬で余暇時間にトレーナーとして活躍する人も多い。日本で言われるところの「有償ボランティア」だ。ちなみにエアランゲン市ではトレーナーは７６０人を超える。

また試合などがあると、テーブルをひとつ出して、ケーキや軽食、コーヒーなどを販売するビュッフェを運営することがある。そのためにケーキを焼き、ビュッフェを運営するのも、立派なボランティアだ。試合結果やクラブの活動記録、ウェブサイトやクラブの機関誌のための記事を書いたり、写真撮影もそうだ。

子供・青少年向けに、スポーツクラブはデモクラシー教育の場としても位置付けられている。スポーツクラブの原則のひとつは「デモクラシー」だが、そういう組織で若者や子供たちは、人の意見に耳を傾け、自由に発言するという振る舞いを学ぶわけだ。もっとも筆者の見聞でいえば、そういう振る舞いは後述するように学校でも学んでいるため、スポーツクラブの特殊性としては見えにくい。だが「先輩後輩システム」の日本のスポーツ組織と比べると、デモクラシーを学ぶ場としてのクラブの特徴を理解できるかもしれない。

硬直的な体育会系の組織では先輩には絶対服従

■既存の日本型構造（タコツボ型）



■ドイツの構造（市民社会型）

上／学校や会社にコミュニティが固定しがちで、個々人の社会的視野が広がりにくい日本。
下／一方、メンバーの属性にとらわれずに楽しめるスポーツクラブが、地域社会の一部になっているドイツ。
© Takamatsu, Heizo

といった、軍隊を思わせる雰囲気があるかと思う。もし「後輩なのに生意気だ」と発言を封じられると、デモクラシーが成り立たない。こう考えると、平等性を強調するドイツのスポーツクラブにデモクラシー教育の機能もあることが理解できるだろう。

行政に参加するスポーツクラブ

冒頭でも触れたように、NPOは行政とともに様々な取り組みを行っている。それはスポーツクラブも例外ではない。

今日、国民全体の健康の底上げは大切なテーマだ。高齢化社会が顕著になってくると、次にくる課題は健康寿命をいかに延ばすかだ。そこで自治体は様々な健康プログラムを行うわけだが、専門的な人材や施設を持つスポーツクラブと当然タッグを組む。

また行政が、あるエリアの発展策を考える場合、土地利用として「遊び」「運動」といった目的の余暇スペースを考えなければいけない。こういう時にも最初からエリア内のスポーツクラブが会議に参加し、コンセプト策定にあたり、現状把握のための情報を提供し、提案を行っている。いわば都市計画にスポーツクラブが加わっているかたちだ。

健康寿命を延ばす目的で、スポーツクラブが自治体と一緒に作成した健康プログラムを楽しむ市民。

ドイツで舞踏会は今日でも様々なコミュニティの社交様式のひとつ。スポーツ関係者が集う舞踏会も行われる（上下とも筆者撮影）。

スポーツクラブがなぜ成り立つのか

さて、ドイツの人々はなぜここまでスポーツクラブに定期的に足を運んだり、自由意思でなんらかの貢献ができるのか。「可処分時間」と「教育」、そして「自我のあり方」の3点から考えてみたい。

まず筆者の実感も含めていえば、ドイツのライフスタイルには自由に使える時間が多い。労働時間の世界比較というのは、実際と隔たりがあるようだが、それでも参考までにOECDのデータをひくと[＊2]、年間の労働時間は日本の1710時間に対して、ドイツは1356時間だ。今日、ドイツでも残業が増えているが、日本から駐在でドイツに滞在した人などは、ドイツのほうがゆったりしていると漏らす人が多い。しかも職住近接。これで物理的にスポーツクラブへ平日の夕方からでも行くことができる。休暇も取りやすいので、クラブの催しに力を入れたい時に、時間を確保できる。

次に教育という観点からいうと、人間の尊厳を軸にしたデモクラシーについて、様々な角度から学校教育に組み込まれている。意見を自由に発言することなどはそのひとつだ。これと関連するのが自我のあり方だろう。社会史をたどると、長い時間をかけて変遷しているのがわかるのだが、カントに代表される哲学や19世紀の工業化の影響で、「自己決定を行う私」という自我のあり方が確立されてきた。

もちろん、これに対する問題もあるのだが、それにしても「自分で自分の人生を設計する」ということが原則になる。年間のうちにいつ長期休暇を取り、何をするか、というのもそういう自我と馴染みやすい。ボランティアにしても「滅私奉公」にならず、あくまでも「自由意思」活動になるのもそのせいだろう。

また、自我が際立つと「他者とどういう関係を持つか」という課題は出てくるが、このあたりもデモクラシーという制度とも連関性を持ちやすい。

そして、スポーツ分野を見ると、「自己決定でスポーツをする自分」という自己像があるように思う。特に競技スポーツを比べると顕著だが、日本の部活などでは「やらされるスポーツ」のような雰囲気もあると聞く。しかし、ドイツの様子を見ていると、自分に合わなければ簡単にやめてしまうし、競技のためのトレーニングも「自己決定で行う」ということがベースに組み立てられているように思う。

日本への提言

日本を見ると、スポーツクラブが少しずつ生まれている。例えば大阪ガス㈱を引き合いに出すと、朝原宣治さん（2008年北京五輪　陸上男子4×100mリレーの銀メダリスト）がNOBY T&F CLUB（ノビィ ティーアンドエフ クラブ）という陸上競技クラブを主宰されている。同氏は大阪ガス陸上競技部副部長という肩書きを持ち、兵庫県にある同社のグラウンドで実際の指導を行っている。会社側からみれば、アスリート育成、町作り、健康増進などを通して行う「社会貢献事業」である。しかしNOBY T&F CLUBからいえば、企業ベースのクラブという見方もできるだろうか。

同クラブに筆者は2018年秋に訪問したことがある。朝原さん以外にもアスリートとしてかなりの実績のあるコーチ陣がいて、ある意味、贅沢なクラブである。小学生と一般コースのトレーニングをのぞいてみると、一言でいえば「真剣ではあるが、不必要にピリピリせず、温和」という雰囲気だ。小学生の会員に、クラブに入って何がよかったかとアンケートをとると、「たくさんの友達ができた」ということが挙がるそうだが、なるほどと頷ける光景である。

また一般コースでは、会員の方たちは、走ることはもちろんだが、それ以外にも様々な運動メニューにコーチのアドバイスを受けながら取り組んでいる。いずれも趣味として競技に出場している人が多いようだったが、中には80代の男性もいた。トレーニングを通して、様々な年代の人と交流できることが楽しいという。朝原さんは、ドイツのスポーツクラブで3年間トレーニングの経験があり、その雰囲気を体験している。これが、NOBY T&F CLUBの運営にも反映されているのだろう。

もっとも、企業との密接な関係を持つ同クラブは、ドイツの一般的なスポーツクラブからみると、かなり特殊な構造だ。だとしても部活などの既存の日本の「スポーツの場」とは質的に違うのを感じた。スポーツ文化が変わろうとしているのだろう。

ドイツの様子を見ると、素晴らしいと感じるものも多いが、制度のみを取り入れても背景が異なるので「劣化コピー」になるだけだ。考えるべきは、「地域の一部としてのスポーツ、社会を作るエンジンとしてのスポーツ」という問いをたてることだろう。そこで既存の組織をどう発展させるべきか、何が足りないか、どういったものを組み合わせて新しい価値を作るかという議論をすることができるだろう。例えば、NOBY T&F CLUBのように企業との関係の中で模索するのもひとつの手だろう。企業の論理とスポーツの価値がぶつかった時にどうするのかといった問題もあるが、一方で企業の持つ様々な資源やノウハウをクラブ運営に活用することも考えられる。

さらに地域スポーツを活発化するには個人の可処分時間をどう増やすか、人間関係をどう作るかなどの課題がある。つまり労働問題や文化・教育といった広範囲で、基本的なところからスポーツの環境整備の必要性があるわけだ。こういう課題に対して「スポーツ側」から働きかけることも大切だ。これが「社会をつくるエンジン」としてのスポーツができることだと思う。

子供たちが楽しくスポーツを学ぶNOBY T&F CLUB（右端が朝原氏）。

注

＊1 内閣府NPOのホームページより（2018年12月28日閲覧）
https://www.npo-homepage.go.jp/about/toukei-info/ninshou-seni

＊2 OECDのホームページより（2018年12月28日閲覧）
https://data.oecd.org/emp/hours-worked.htm

「内と外」「過去と現在」でつながる食文化
ルネッセ・セミナー「食で、まちを変えられるのか」報告

都市や地域社会の価値・活力を、どうすれば再起動させることができるのか？
2018年12月に行われたルネッセ・セミナーのテーマは、「食で、まちを変えられるのか」。
そして、これに相応しいゲストとして、ふたりの料理人を招いた。
ひとりは、かつて奈良県東吉野村で「リストランテ ロアジ」を開業したイタリア料理シェフ・永松信一氏。
もうひとりは「日本料理 かこみ」を開業し、
江戸時代の大坂料理の再現にも取り組んでいる若手料理人・椿山一希（かこいやまかずき）氏である。
「異色の組み合わせ」への関心も高く、会場には食やまちづくりといった仕事に携わる人たちだけでなく、
ビジネスマンや主婦といった幅広い層から熱心な参加者が集まった。

脇坂敦史＝取材・執筆
橋本護＝撮影

五感で感じる大阪は、それほど変わっていない

「大阪のイメージを色で表すと何色ですか？」「大阪の音といえば何を思い浮かべますか？」「大阪の匂いは？」「大阪の味は？」「大阪のイメージはかたい？　やわらかい？」

少々意外ともいえる質問の連続から始まった今回のセミナー。まずは大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所の池永寛明所長が問題提起を行った。

目に見える色や形、耳に聴こえる音、そして匂いや味、さらには触覚まで。人びとが五感で抱く「大阪のイメージ」には、「内と外」で大きなギャップがあるようだ。たとえば大阪に暮らしている人の多くは、自分のまちを「水の都＝青」と感じているのに対し、外部の人が抱く大阪のイメージは活動的な赤だったり、阪神タイガースの黄色だったりする。

うるさい、治安が悪い、装いが派手……。大阪に押しつけられた、こうした負のイメージの多くは、1960年代以降にメディアを通して拡散・形成されたものが多いという。それに対し、実際に大阪で暮らしている人びとが普段からもっているイメージを分析してみると、むしろ歴史的に脈々と受け継がれてきたリアルなまちの姿に近いものであることが分かってくる。

「今、多くの外国人が大阪に魅力を感じており、外国人観光客訪問率は国内トップになりました。世界における『住みやすい都市ランキング2018』でも、ウィーン、メルボルンに次いで三位に選ばれています（表）。でも実をいうと、大坂は江戸時代の頃から今と変わらず水の都であって、日本一の観光都市だったのです。訪れる人は、行き交うたくさんの船や天満青物市場などを見て『天下の台所』の活力を感じました。そして四天王寺や大坂城を訪れ、道頓堀で芝居を楽しみ、さらに大坂料理を食べた。大坂にはかつて『浮瀬（うかむせ）』とか『西照庵（さいしょうあん）』といった、誰もが一生に一度は行きたいと思っているような料亭があったのです（池永）」

五感で感じる風土や文化はどうやってつくられるのか？　そして、「本来の大阪」や「本来の近畿」を再起動させるために何が必要か？　そこで重要となるのは「内と外」「過去と現在」をつなぎ、翻訳・再編集することだというのが、「ルネッセ」の考え方だ。

今回のゲストである永松信一氏はイタリア料理の真髄を伝えながら日本の食材や風土に合ったレストランをつくり、地方に新しい風を吹き込んできた経験をもつ。そして、椿山一希氏は江戸時代の大坂でふるまわれた本膳料理の再現などを通し過去に学び、現代性を融合して新たな大阪料理をつくろうとしている。料理を通して「内と外」「過去と現在」をつなぐふたりの経験から、多くのことが学べるはずだ。

イタリア料理の永松氏（写真奥左）と日本料理の椿山氏（写真奥中）という異色の組み合わせが高い関心を集め、会場は満席となった。

イタリアには「本物はひとつ」と呼べるものが残っている

永松信一氏の話は、日本よりも濃密なイタリアの地域性を強調するものとなった。その象徴として、イタリア文化を語るうえで欠かせないバール（お酒も飲める喫茶店のような場所）や市場がもっている重要な役割を紹介してくれた。

「イタリアで修業していた頃、まだ通貨がリラの時代でした。カプチーノ一杯が当時、60～70円だったと思います。人びとはバールに通い、毎日7杯も8杯も飲んでいた。バールは、家から歩いて行ける身近な居場所であり、そこで地域とのつながりが親から子へと脈々と受け継がれている。幼なじみが、80歳になっても毎日のように集まって、サッカーの話をしていたりするのです」

日本と同じく核家族化が進んでいるとはいえ、家族の全員が集まり長い時間をかけて食べるランチといったイタリアならではの食文化も健在だ。食を通して承継される文化のあり方が、深い地域コミュニティを形づくる大きな要因となっている。

フィレンツェでの修業時代に永松氏がよく仕入れに通っていたという、サンタンブロージョ市場の様子も写真とともに紹介された。近郊でつくられた新鮮な野菜が集まり、質のよいオリーブやチーズ、生ハムなど、小規模な生産者が昔ながらの製法を守りながらつくっている商品を扱う店が多く並ぶ美しい場所だ。イタリアでは、こうした小規模の市場で買い物をする人が多いという。

「ひとつの国に統一されてからの歴

■表：世界で最も住みやすい都市ランキング2018 トップ10

2018順位	2017順位	都市名	国名
1位	2位	ウィーン	オーストリア
2位	1位	メルボルン	オーストラリア
3位	-	大阪	日本
4位	5位	カルガリー	カナダ
5位	-	シドニー	オーストラリア
6位	3位	バンクーバー	カナダ
7位	4位	トロント	カナダ
7位	-	東京	日本
9位	-	コペンハーゲン	デンマーク
10位	5位	アデレード	オーストラリア

出所：英誌『エコノミスト』の調査部門「エコノミスト・インテリジェンス・ユニット」（EIU）

史が浅いということもあって、とにかく地方色が根強い。日本も昔はそうだったと思いますが、シチリアにしかない食材、プーリアにしかない食材といったものがちゃんと残っていて、それしか食べないという人も少なくありません。EU統合後は海外からもたくさんの安い食品が入ってきましたが、流通革命の影響はまだ日本ほど大きくない。新しい流れに逆らって昔ながらの食文化を守ろうとする、スローフードのような運動が生まれたことも大きいと思います」

2015年にユネスコの「食文化創造都市」に認定されたパルマでつくられるパルミジャーノ・レッジャーノのように、「本物はひとつ」と呼べるようなものが、たくさん残る。伝統を守り、簡単には変えない。それがイタリア食文化がもつ多様性の源のようだ。30年ほどで食生活ががらりと変わってしまった日本でも、今ならまだイタリアの経験に学ぶことができるかもしれない、と考えさせられる話だ。

江戸時代の料理を学びながら、新しい大阪料理を生み出す

栫山一希氏は自身が再現に携わった大坂の本膳料理について、美しいお膳の写真とともに解説してくれた。

リストランテ ロアジ高島
永松信一
（ながまつ・しんいち）

東京のレストランで修業後、1986年イタリアに渡り、フィレンツェの大学に籍をおきながら、イタリア各都市のレストランで働く。帰国後、東京などのレストランに勤めたあと、1995年奈良県東吉野村で「リストランテ ロアジ」を開業。2015年滋賀県高島市琵琶湖畔でパン店「パネ・クラシコ・イタリアーノ」、2016年「リストランテ ロアジ高島」を開業。イタリアと日本を行き来し、地域の強みを活かしたスローフードを実践している。

基になったのは、1813（文化10）年の秋、道修町（大阪市中央区）で長崎奉行所の役人に出されたという献立であり、周辺の町民がお金を出し合ってつくったものだ。

「そもそも、くずし字で書かれた献立が読めない、というところから始まりました（笑）。写真のような直接的な資料は、もちろんありません。さまざまな文献にあたって当時の旬の食材を調べたり、絵に描かれたものを見たりしながら、自分なりの再現料理をつくりました。ご覧の通りとにかく品数が多く、汁物だけで3つも4つもある。とても食べきれる量ではありません。最初の本膳に始まり、二の膳、三の膳と続きますが、後半はほとんど見るだけで、眺めて楽しむもの、そしてお土産として持ち帰るものでした。当時の大坂の人がもてなしにかけた労力の大きさに驚くとともに、人と人をつなぐ料理というものの役割を改めて強く感じます」

こうした経験から、栫山氏は大坂料理の本質ともいえる特徴をいくつか指摘する。大坂料理は出会いもの。つまり、「天下の台所」に集まってくる旬の食材をいかに組み合わせるか。それぞれのよさを引き立てる料理だという。そして、始末の料理。船場汁（せんばじる）がその代表例といえるが、食材を大切にしてなるべく無駄を出さない。

「先人の知恵や経験は、学べば学ぶほどすごいと感じます。ただ、料理は変化していくものです。正しい伝統を伝え、守ることだけに固執するようなものではありません。ですから私も『奇抜な』とは少し違いますが、料理の本質を踏まえながらつねに新しいものにチャレンジしていきたいと思っています」

先に永松氏から紹介のあったイタリアの市場にくらべ、日本では市場が活力を失っているのではないか、との現状も指摘された。栫山氏が日々の仕入れに通っている大阪中央卸売市場（本場）も、全国からあらゆる食材が手に入る便利な場所ではあるが、とにかく広すぎる。活気や人間味のようなものが薄れてしまっていると感じることがあるという。野菜で有名な天満の青物市、雑喉場（ざこば）の魚市を描いた古い絵を現在とくらべれば、たしかにその違いは一目瞭然。これからの大阪の食文化を考えるうえで、大きな課題があると感じられた。

ともにおいしさを共有する時間が、豊かな食文化をつくっていく

セミナーの最後はふたりの料理人同士、さらに、参加者を交えてのセッションとなった。

「私は神戸でフランス料理を修業したこともあります。手間や技術をかけたこだわりのソースをつくることの多いフランス料理にくらべ、素材を大切にするイタリア料理の方が、

イタリアの豊かな食文化を支える、活力あふれる市場。

イタリアの地域社会には欠かせない存在であるバール。

日本料理 かこみ
栫山一希
（かこいやま・かずき）

大阪・北新地で鶏鍋専門店を経営していた父に憧れ、神戸や東京などの料亭・旅館で日本料理を学び、神戸・三宮のフレンチでも修業したのち、「チャレンジキッチン」で優秀賞を受賞、27歳で堂島のホテルエルセラーン大阪で開業。江戸時代の大坂・道修町でふるまわれた本膳料理の再現をはじめとする大坂料理を研究し、過去と現代とを融合した大坂料理のあり方を産経新聞社主催「上方生活文化堂」などで探求している。

上／大阪を代表する市場である大阪中央卸売市場（本場）。
下／栫山氏によって再現された本膳料理「与の膳（四の膳）」。

ルネッセ・セミナー「食で、まちを変えられるのか」

実施日　2018年12月8日（土）　10：00 ～ 12：30

会場　グランフロント大阪
大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所 都市魅力研究室

主催　大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所

イタリアと日本を行き来して「地域における食文化」を考える永松信一氏、江戸時代の食と現代の食を融合して「大阪の食のあり方」を考える栫山一希氏をゲストとして招き、大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所の池永寛明所長とともに、都市や地域社会の活力における食の可能性について活発に意見を交換した。

上／栫山氏と永松氏を交えての和やかなクロストーク。
下／イベント参加者からも相次いで熱心な質問があった。

ずっと日本料理に近いと感じます（栫山氏）」

「地方でレストランをやりたいと思ったのは、フィレンツェ郊外で野菜づくりをしながら営業している家庭的なレストランを見たことがきっかけ。地元のかぎられた食材を大切にしながらつくるのはとても大変ですが、とても楽しいこと（永松氏）」

料理人同士だからこそ相通じる話題の一方、会場からは家庭での食事について、もっと語ってほしいとの要望が出た。「食で、まちを変えられるのか」という視点からも、家庭料理が果たすべき役割はあるのではないだろうか？

質問を受け、栫山氏からは「日本料理の基本は水と出汁だと思っています。その家ならではの出汁の味をぜひつくってみてほしい」との提案があった。一方の永松氏は、家庭でも旬の野菜をもっと食べてほしい、とリクエスト。消費者として、本当においしい旬の野菜をもっと食べたいというメッセージを、ともに生産者や市場に送ろうと呼びかけた。

熱心なセッションを締めくくったのは、太平洋戦争から戦後にかけて十分に食べものがない苦しい時代を経験したという年配の女性だった。「何を食べるべきか、ということは家庭の主婦にとって難しく、なかなか一概には言えない。それでも、おいしいねと言いながら食べる。そんな時間を親子でともに過ごすことで味がつながっていくと感じました」と食文化への思いを語った。家族全員が集まる賑やかなイタリアのランチで伝わっていくものこそ、まさにそれだろう。個食化が進む日本の家庭で、これからも食は文化としてつながっていくことができるのだろうか。

「内と外」そして「過去と現在」が、不思議な化学反応を見せるセミナーとなった。多くの参加者にとっても、まちを変えることのできる食の力を、さまざまな側面から考え直す貴重な時間となったはずだ。

Column

「縁人（えんじん）」を軸にした地域活性化の新しい形

滋賀県高島市がもつ豊かな自然と文化の魅力を、「縁人」の力を借りて発信するというイベントが、グランフロント大阪「ナレッジサロン」で開催された。「内と外」の双方向から地域の魅力を捉え直し、「再起動」へとつなげる試みを取材した。

高島縁人発掘プロジェクトキックオフイベント「大阪で高島とつながる」

実施日　2018年12月8日（土）15：00 ～ 17：30

会場　グランフロント大阪　ナレッジサロン

主催　滋賀県高島市

滋賀県高島市と縁をもつさまざまな立場の人「縁人」が登壇し、その豊かな自然と文化の魅力を語った。移住者や半居住者といった人びとを地域活性化の鍵と考え、本イベントをきっかけとして、参加者にも「縁人」として高島市に関わってもらうことを呼びかけた。

「高島縁人」とは何か？　滋賀県高島市がつくったこの造語は、住民から観光客まで高島に縁をもつ人（いわゆる「関係人口」）の総称だ。なかでも焦点をあてるのが、そのちょうど中間にあたる新しい移住者や半居住者、頻繁に訪れるリピーターといった人たち。彼らの力を地域の活力につなげる「エンジン」としたい、との願いをこめる。「内と外」をゆるやかな形でつなげるための試みは、どんなものか？　12月に大阪で行われたキックオフイベント「大阪で高島とつながる」に参加させてもらった。

師走の華やいだ雰囲気に包まれたグランフロント大阪で開催されたイベントには、近畿圏から幅広い層の人びとが集まった。まずは13年前に名古屋から高島市朽木に移住したというびわ湖高島観光協会の坂井田智宏氏と、高島市に拠点をもつプロカメラマンの葛原よしひろ氏が、「発信応援隊」として、外からやってきた人の視点を大切にしながら、高島の豊かな自然や食文化を熱く語ってくれた。

つづいて登壇したのは、3年前に高島市新旭町饗庭（あいば）に居を移し、パン店とイタリア料理店を営む永松信一氏と、高島市深清水にログハウスを建て大阪との二拠点生活が11年にもなる大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所の池永寛明所長。パン店とレストランが高島市にとって新たな魅力となり、別荘の居住者、外国人観光客、サイクリスト、そして地元の農家といった多様な人びとをつなぐ拠点となりつつあることが紹介された。

永松氏は、「朝はパンを焼きながら、小浜の港まで新鮮な海の幸を買いに行ったりすることもある。市内で穫れる地元野菜だけでなく、山や湖の食材にも恵まれたこの地で、さまざまな人と出会いながら仕事をするのは楽しい」と語ってくれた。池永所長は週末を高島の美しい自然のなかで過ごすことのメリットを強調した。「時間的にも空間的にもすべてがつながってしまうIT時代だからこそ、高島で五感を働かせる時間に想像力を刺激され、仕事でもクリエイティビティ向上につながっている」と言う。また、高島のよさは自然だけではないとし、『琵琶湖周航の歌』でも知られる湖上ルート、日本海と京都をつなぐ要衝として栄えた高島市今津の繁栄といった過去の歴史とポテンシャルにも目を向ける。

高島市の「内と外」、そのニーズ（期待していること）とシーズ（提供できること）をつなぎ、新たな可能性を模索するプロジェクトはスタートしたばかり。今後、東京などでも同様のイベントを開催する予定だ。小さなつながりがたくさん生まれ、地域を「再起動」させるためのエンジンとなりうるのか、今後も見守っていきたい。

イベントの後半に登壇した、永松氏と池永所長。

会場では、柿など高島市の特産品の展示スペースも。

私と京都

文＝ベニシア・スタンリー・スミス
Venetia Stanley-Smith

画＝浅妻健司

1971年4月11日、台湾発のフェリーは大きな火山の桜島に近づき、やがて鹿児島港に着きました。そのとき私は20歳。前年の9月上旬に英国から旅立った私は、ガンジス川上流の聖地ハリドワールにあるアシュラム（瞑想道場）で、数ヶ月間、瞑想中心の生活を送りました。そして次は日本へ向かうことにしたのです。

私は日本に親近感を持っていました。母の実家ケドルストン・ホールで、子供の頃から日本の古い工芸品や写真などを見ていたからでしょうか。私の曾祖父の兄ジョージ・カーゾンはインド総督兼副王や英国の外務大臣などを務めた政治家です。明治時代に2回、日本を訪れ京都へも足を運んでいます。カーゾンが撮影した日本の写真が、幼い私の記憶の片隅に焼き付いたのかもしれません。

鹿児島港から町に出た私は、日本人が和服を着ていないことにまず驚きました。旅の途中で仕入れた「Fugetsudo」という情報だけを頼りに、東京へ行こうと決めていました。その頃、風月堂はカウンター・カルチャーの拠点となる銀座の喫茶店でした。そこへ行きたいのにお金がありません。ならばヒッチハイクするしかない。

道路沿いで親指を上げていると一台のトラックが停まりました。助手席に乗り込むと、インドの流行歌と中国の民謡を混ぜたような、これまでに聴いたことのない音楽がラジオから流れています。初めて聴いた演歌に、私は異国情緒を感じました。トラックから窓越しに見る家々には、大きな布で作られた色とりどりの鯉が風になびいていました。それが何なのか知りたいと思いましたが、英語を話さない運転手さんと会話ができません。平野はすべて田畑として開かれており、その美しさに私の心は和みました。翌朝、真っ青な空の下で朝露に輝く桜の花たちが、美しく印象的でした。やがて、たくさんの煙突がある工場地帯に入り、これが本当の日本の姿なのかと思いました。「大阪です」とトラックは橋の横に停まりました。お礼を言って私は運転手と別れました。

自分がどこにいるのかわからないまま、私は川沿いを歩きました。ふと見ると交番があります。「コンニチハ！　英語できますか？」と声をかけると、「ノー！」と巡査は手を左右に振りました。「東京？」と訊くと、首を振りながら、「東京、あっち、あっち」と指さして、「新幹線、新幹線」と言いました。私が「ノー・マネー」と言って出ようとすると、彼はパトカーを指さして乗るように手招きします。「ああ、逮捕されるかも……」。パトカーはジャングルのように交差した高架道路をしばらく走りました。高速道路の入り口でパトカーは停まり、巡査は私に待つように言って車を降りました。この人はいったい何をしようとしているのだろう……。しばらくして「東京、OK！」と喜びに満ちた顔。巡査は東京に向かうトラックを探してくれたのでした。

次のトラック運転手は、少し英語を話しました。しばらく運転したあと、「お腹すいたか？」と訊いてくれました。そのとき私は1日以上何も食べていませんでした。食堂で彼は、私のために親子どんぶりを頼んでくれました。今でも忘れられない日本食のひとつとなっています。やがて暗くなり、私がウトウトしていたので運転手は後ろの寝台で横になるよう勧めてくれました。この人を信用していいのだろうかと不安がありましたが、疲れていた私は寝台を使わせてもらうことにしました。あまりの狭さと、壁のヌード写真に驚きつつ、私はお祈りをして眠りにつきました。トラックは夜通し走ったのでしょう。「風月堂！」と言って、私を起こす運転手の笑顔がありました。

風月堂がオープンするまでしばらく待ったあとで、バッハが流れる店内に入りました。長髪のアメリカ人らしい青年が英字新聞を読んでいたので、話しかけてみました。私が途方に暮れている様子がわかったのでしょう。私が無一文だと言うと、彼は親切にもいくらかお金を貸してくれて、新宿の安宿の場所を教えてくれました。

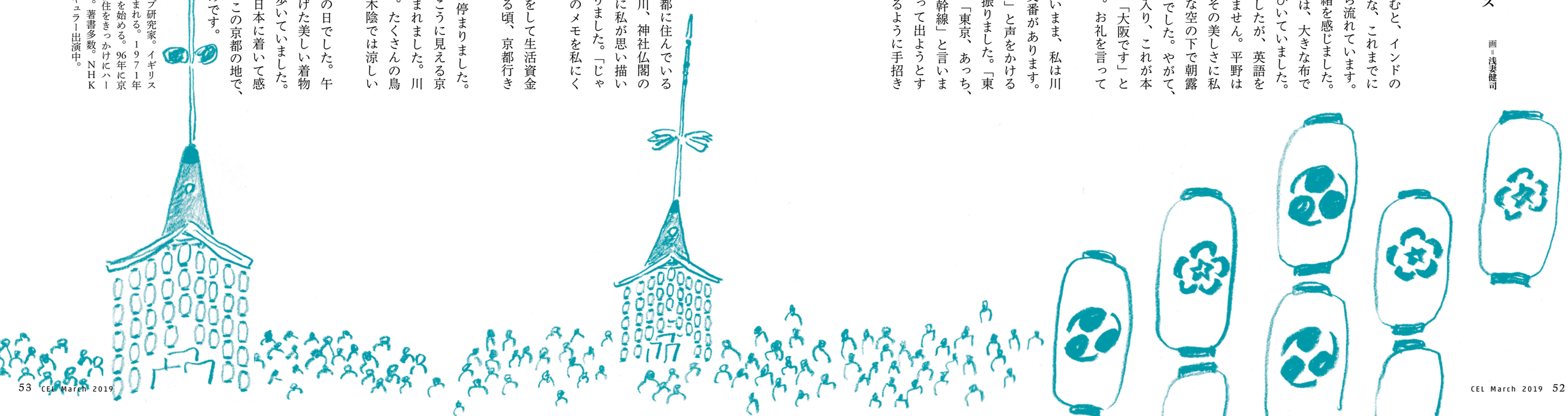
チャールズというその青年は京都に住んでいると言いました。京都の美しい山、川、神社仏閣の話などを彼から聞くうちに、まさに私が思い描いていた日本ではないかと嬉しくなりました。「じゃあ、また京都で！」と彼は連絡先のメモを私にくれて立ち去りました。

しばらく私は東京でアルバイトをして生活資金を貯めました。そして梅雨が終わる頃、京都行きの夜行バスに乗り込みました。

翌朝、御池大橋の近くにバスは停まりました。やがて朝日が顔を出し、鴨川の向こうに見える京都・北山の山並みは、黄金色に包まれました。川沿いに次の橋まで歩いてみました。たくさんの鳥たちが川岸でくつろぎ、並木道の木陰では涼しい風が吹き渡っていました。

偶然にもその日は祇園祭の宵山の日でした。午後になると通りでは、髪を結いあげた美しい着物姿の女性たちが、蝶が舞うように歩いていました。心優しい人々、繊細な文化を持つ日本に着いて感動する日々の連続でした。そして、この京都の地で、さらに私は日本に魅了されていくのです。

ベニシア・スタンリー・スミス　ハーブ研究家。イギリス貴族の館で知られるケドルストンに生まれる。1971年に来日し、78年より京都で英会話学校を始める。96年に京都・大原にある築100年の古民家移住をきっかけにハーブ栽培やハーブを使った生活を始める。著書多数。NHK番組『猫のしっぽ　カエルの手』にレギュラー出演中。



「ルネッサンス」の今とこれからを考えるための10冊

「内と外」「過去と現在」をつなぎ直し、新たな価値をつくりあげるため、
生活文化や教育、芸術のあり方を捉え直すことが重要です。
今号で紹介した事例の理解をより深める助けとなる10冊を選びました。

1 『大阪料理
――関西割烹を生み出した味と食文化』

本書の冒頭では、関西割烹のルーツである大阪の食文化の歴史をたどり、今日までの変遷と、そこに通底する精神性を解説。それをふまえ、本編は大阪料理会に所属する料理人による多彩な大阪料理が披露される。前半は戦前から昭和、後半は平成の大阪料理が50選ずつ、美しい写真と解説やレシピとともに紹介されるという充実した構成。

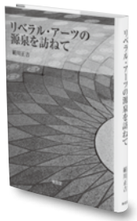
大阪料理会＝監修
旭屋出版／2017年

2 『日本メディアアート史』

戦後日本の技術革新とともに進化したメディアアートの通史。60年代を牽引した草月アートセンターに始まり、大阪万博、つくば科学博、セゾン文化など、その背景を成す時代像に焦点を当て、当時を知る人びとの取材を重ね緻密に論ずる。芸術家たちがテクノロジー、マスメディア、社会といかに結び、切り離し、独自の芸術表現を成し得たのか？2025年の大阪・関西万博開催の参考にも。

馬定延＝著
アルテスパブリッシング／2014年

3 『リベラル・アーツの源泉を訪ねて』



日本におけるリベラル・アーツ教育の先駆けとされる国際基督教大学の元学長がその本質に迫る。古代ギリシャに遡り、リベラル・アーツの源流とされる数学の知的営為をたどりながら、西欧世界における知の形成のあり方とリベラル・アーツの理念を示す。原点に立ち返ったうえで、教養主義などと混同される一般教育の現代における意義を整理し、大学教育の今後の方向性を示唆する。

絹川正吉＝著
東信堂／2018年

4 『地域主権の国 ドイツの文化政策
――人格の自由な発展と地方創生のために』

芸術文化を、個人の趣味嗜好や市場原理で操られるものとして放置せず、公共の財産と捉える。その視点から立ち上がってきたのが、芸術文化と市民をつなぐ“社会政策としての文化”の発展だ。ナチス政権の負の時代を経て、ドイツ各地で育まれた文化的コモンズ形成の歴史を多面的に考察。日本が取り組む地方創生にもひとつの指針を与える。

藤野一夫、秋野有紀ほか＝編
美学出版／2017年

5 『日本の食文化史
――旧石器時代から現代まで』

食文化研究の第一人者である著者が、日本の伝統的食文化がどのように形成されてきたかを俯瞰してまとめた通史。日本独特の地形、気候、宗教観などに影響され生み出された、味噌、醤油、だし、寿司、ソバ、テンプラなどにまつわる歴史をひもとくことは、世界的に人気を博している日本食の魅力を再発見することにもつながっていく。

石毛直道＝著
岩波書店／2015年

6 『文楽の日本
――人形の身体と叫び』

フランスの批評家である著者は2004年に大学の特任教授として来日し、文楽と出合う。文楽のみならず女義太夫にも親しみ、自身も義太夫を学んだ体験的観点から論じる新たな文楽論。西洋演劇や歌舞伎、能との違いも視野に入れ、多くの創見とエスプリに満ちた身体芸術論、比較文化論を展開する。外から文楽を語る視点には学びが多い。

フランソワ・ビゼ＝著　秋山伸子＝訳
みすず書房／2016年

7 『人間にとって科学とは何か』

真理の探究という知的営みから、社会システムや価値、倫理を変えるほどの巨大な存在となった科学。今や科学者だけでなく、われわれ生活者も科学に対して無関心ではいられない時代である。生活・社会に対する科学の影響を理解するためのリテラシーを養うため、近代以降の科学の発展の歴史と社会との関係をひもとくとともに、科学教育を含めた横断的な一般教育の必要性を提言する。

村上陽一郎＝著
新潮選書／2010年

8 『ドイツのコンパクトシティはなぜ成功するのか
――近距離移動が地方都市を活性化する』

人口減と超高齢化が進む日本。現状の都市計画や交通システムのままでは、市民サービスの低下は止まらず、自治体そのものが消滅していく可能性が高い。待ったなしの課題への解決策を、ドイツにおける移動距離の短いまちづくり「ショートウェイシティ」や自転車の活用などに学び、コンパクトシティの本質を見極めたい。

村上敦＝著
学芸出版社／2017年

9 『メディア・アート原論
――あなたは、いったい何を探し求めているのか？』

コンピュータの発達により登場したメディア・アート。今や芸術表現にとどまらず、ゲームや舞台演出、人工知能やバイオ・テクノロジーなど広がりをみせているが、その明確な定義を知ることは難しい。本書では、現場を熟知した第一人者が、対談形式でその過去・現在・未来を解説するなかで、これからの表現方法の可能性を読者にも問う。

久保田晃弘、畠中実＝編
フィルムアート社／2018年

10 『文楽のこころを語る』

当代随一の浄瑠璃語りであり人間国宝でもあった七世竹本住大夫（2018年4月没）。三大名作から10年に一度の珍しい演目まで19演目について、独自の語り口で、作品の面白さや詞の一行一行に込められた工夫や解釈を分かりやすく解説する。芸の真髄を語りつくす本書は、文楽ファンのみならず文楽初心者にもおすすめ。

竹本住大夫＝著
文春文庫／2009年

CELからのメッセージ

未来を夢見る東京、過去に固執する大阪

大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所所長
池永寛明
Ikenaga Hiroaki

幕末の絵師・戯作者でもある大坂商人、暁鐘成（あかつきかねなり）が催した「汁講」を再現。大阪の再起動を議論した。
（第10回上町台地 今昔フォーラム）

人々の活動量が減っている。情報技術の進展で時代速度が加速するのに対して、少子高齢化とIT依存が高まることで人々の動きが鈍り、都市・地域の停滞を感じる。

人が動いて仕事をすると、熱が発生する。ひとりの動きが誰かを刺激し、その人も動きだし、場における熱が広がる。あたかもブラウン運動のように、次々と反響しあってエネルギーを生み出す。しかし人の動きがとまると、場は冷えてしまう。

失われた20年から、さらに日本は10年を失う。東京は「前へ前へ。進歩を成長を」を標榜して夢を見て、未来に依存する。一方、大阪は秀吉、天下の台所、北前船、大大阪、1970年大阪万博など過去の「栄光」にこだわる。「これから必ずこうなる」と未来を志向する東京、「これまでこれでうまくいった」と過去に依存する大阪はともに現状を直視しない。過去、現在、未来の時間軸が繋がらない。

「ルネッセ（再起動）」を立ちあげた課題認識はここにある。過去から現在の流れを見つめ、現状における「変化」を読み解くと、未来が見える。未来は現在に埋めこまれているが、現状が掴めないので未来が見えない。

「ルネッセ」の対話のなかで、「文化」という言葉がよく出てくるが、それぞれが考える「文化」の定義はまちまちである。本来、文化とはカルチベイト(cultivate)が語源で、耕作、栽培、洗練、醸成を意味する。文化は承継して繰り返すことで生まれる。ひとりの天才や、すぐれた技術者、アーティスト、ミュージシャンが現れても、突然イノベーションは起きない。イノベーションが成立するには、新たな技術、サービス、ビジネスモデルを考えて実行できるイノベーターと、それを理解し受け入れて応援する人たちがいて、文化が育っていなければならない。それが土壌であり風土である。新たなモノ、コト、姿、ナレッジを柔軟かつスピーディーに受け入れ、混じりあわせるという土壌と考動様式というスタイルをもった都市が、イノベーションを生み、文化を育む。いま何が起こっているのかを掴み、本質を発掘・再編集・再定義して再起動させれば、必ずや日本は再興しうる。

CELホームページ
http://www.og-cel.jp/
エネルギー・文化研究所（CEL）の活動内容、
「CEL」バックナンバーをご覧になれます。
※CELホームページに掲載する「読者アンケート」にご協力願います。

Facebookページ
https://www.facebook.com/osakagas.cel

Volume121
March 2019

特集
ルネッセ
今とこれから

2019（平成31）年3月1日発行

発行　大阪ガス㈱
エネルギー・文化研究所（CEL）
〒541-0046
大阪府大阪市中央区平野町4-1-2

発行人　池永寛明

企画・制作　熊走珠美

編集人　日下部行洋

編集　㈱平凡社

アートディレクション＆デザイン　okamoto tsuyoshi +

校正　㈱アンデパンダン

印刷・製本　㈱東京印書館

お問い合わせ窓口　大阪ガスビジネスクリエイト㈱
TEL 06-6205-4650
FAX 06-6205-4759
CEL@ogbc.co.jp

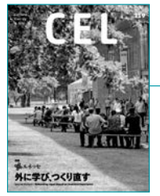
Research Institute for Culture, Energy and Life
©2019 OSAKA GAS CO., LTD

※禁無断転載複写
※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を示すものではありません。

「CEL」バックナンバー

※最新の6号。創刊（1987年）からのバックナンバーはCELホームページに掲載しています。

vol.120　2018年11月発行
特集
ルネッセ
外に学び、つくり直す［アジア編］



vol.119　2018年7月発行
特集
ルネッセ
外に学び、つくり直す

vol.118　2018年3月発行
特集
ルネッセ「耕」――文化を問い直す

vol.117　2017年11月発行
特集
ルネッセ「交」――交流（つながり）を問い直す

vol.116　2017年7月発行
特集
ルネッセ「場」――都市（まち）を問い直す

vol.115　2017年3月発行
特集
外に出て「日本」を見直す